
上海の光と影と ◇Camouflage（偽装）◇

一二三四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

上海の光と影と ◇Camouflage (偽装) ◇

【Nコード】

N8160X

【作者名】

一二三四

【あらすじ】

経済発展目の覚しいShanghaiには、世界中から欲望に塗れた金流れ込み、人心を惑わしていた。

その結果、光の当る部分と影の部分が生まれ、その濃淡は近年益々激しくなっている。

人間の果てしない欲望は、漆黒の闇をどんどん広げていた。

或る日、黄浦江を眼下に見下ろすマンションの一室で、男女二人の遺体が発見された。

ひとりは日系企業の総経理（社長）松田幸夫、もうひとりはカラ

オケの小姐（女性従業員）の汜莉ファン・リーだった。

松田の妻子とともに学生時代からの友人野村茂夫が、遺体を引き取りに来た。

状況を聞いた野村は、自殺ということに疑問を持った。

野村は休暇を使って、真相究明にShanghaiへやって来た。与えられた時間は二週間。

松田と汜を殺害した殺し屋グループは、日本の黒幕の指示を受けて、野村に襲い掛かったが、織田の機転で逆に取り押さえられる嵌めになる。

日本の黒幕連中は、松田と汜の殺害の首謀者でありながら、巧みに罪を逃れたかに見えた、が……。

中国における食品Camouflage（偽装）に端を発し、日本にも飛び火、未曾有の事件へと発展する。

尚、この小説は他のサイト（無料のネット小説サイト）にも掲載しています。

第一章 黄浦江に消えた恋

一、死者からの伝言

1

二〇〇七年五月の或る日……、ファン・ブルー・ジャン黄浦江をのぞむ外国人向け高級マンションの一室から、男女二つの遺体が発見された。

二つの遺体は、ベッドの上に真っ直ぐ並び、男の右手と女の左手は硬く握られていた。

不審死ということから二つの遺体は司法解剖され、死因は青酸カリによる服毒死と結論付けられた。

その後、大した捜査も行わず、自殺、覚悟の心中と公安（警察）は断定した。

実際、室内を物色された様子も争った形跡もなかった。

日本から男の遺体を妻と娘が引き取りに来了。

女の母親は、

『愛し合う二人のために、せめて男の遺骨の一部を女の墓に入れて欲しい』

と泣いて懇願したが、男の家族はそれを強く拒絶した。

それも当然であろう、妻や娘から見れば、男は家族を裏切っていたのだから……。

遺体の引き取りには、家族と一緒に男の友人がついて来ていた。

友人の名前は野村茂夫、死んだ松田幸夫の会社とはライバル関係にある“四星商事”の社員である。

松田と野村は大学の同期生だった。

在学中は松田がエースナンバーを背負い、野村はキャッチャーで四番、六大学野球で共に神宮を沸かせたバッテリーである。

二人はライバル企業に就職したが、卒業後も無二の親友として、時々会っては酒を酌み交わし、旧交を温め合っていた。

付き合いは、彼此三十年近くなる。

2

公安局（警察署）の霊安室で亡き友と対面した野村は、遺体の顔にかけられた布を持ち上げ、ジッと見詰めながら声に出して言った。

「バカやろう。なんで俺にひと言、相談しなかったんだ。奥さんと娘さんを泣かしやがって……」

亡き友を前に、野村は人目を憚らず悔し涙を流した。

「親父さんとお袋さんに会ってきたが、二人とも呆けたような顔つきで、俺は慰めの言葉もかけられなかったぞ。別れ際にオマエの親父さんがなあ……、絞り出すような声で、息子を頼みますと言った」隣から妻と娘の啜り泣きが聞こえてきた。

野村は合掌し、布で男の顔を覆うと、

「でも、松田よ。如何にもオマエらしい責任の取り方だ。随分悩んだんだろう……苦しかったろう……。すまなかった、相談相手になってやれなくて。奥さんと娘さんのことは心配するな。それに、ご両親のこともな。成仏しろよ……」

と、心の中で呟いていた。

その後、公安からの説明と現場写真を見た野村は、二人の死に幾つかの疑問を抱いた。

しかしここは中国、野村が捜査に口を挟む余地はない。

同行してくれた張小平に野村は公安局を出てから、

「張さん、色々のご苦労だったね。ありがとう。このとおり、お礼を言います」

と、深々と頭を下げた。

「なにを仰いますか……、私の方こそお詫び申し上げなければなりません。奥様、お嬢様、こんなことになってしまって、本当に申し訳ございません」

張は三人に向かって深々と頭を下げると、しばらく俯いたまま、顔

をあげられなかった。

野村の耳に啜り泣きが聞こえてくる。

「張さん、どうぞお顔をおあげください。本当に良くしていただいて……、いつも主人が申しておりました。張さんが居るから、俺も偉そうな顔をしていられるンだって、うっ、うう……、ど、どうぞお顔をおあげください」

妻と一緒に娘も張に向かって頭をさげた。

駐車場に停めてある車まで戻る間に、野村は張に囁きかけた。

「ところで張さん、もし時間があれば、少し話を伺いたいのだが……」

「あ、はい。私でしたら大丈夫です」

「そうですか、ありがとうございます。それじゃ、二人をホテルへお送りしてから、お願いします。だいぶお疲れの様子ですから」

「申し訳ございません」

と松田の妻が言った。

「いえ、とんでもありません。私にできることでしたら、なんでもいたします。本当に松田さんは優しい方でした」

娘が顔を両手で覆って、ワァーッと泣き出した。

「……………」

野村はかける言葉も思い浮かばない。

やがて“花園飯店”^{ガーデンホテル}に到着、松田は二人をエレベーターまで導いた。

「奥様、慶子さん、私は少し張さんとお話をします。どうぞ、部屋でゆっくりとお休みください」

「本当に野村さん、なにからなにまで、ありがとうございます」

と二人は頭を下げ、悲しみを湛えた表情のままエレベーターに乗った。

3

野村は張をホテル一階の“オアシス”に誘い、一番奥の喫煙席に陣

取った。

アメリカンコーヒーを二杯注文し、野村はキャビンマイルドの赤箱を取り出すと、

「悪いが張さん。一本、吸わしてもらおうよ」

タバコを摘み出しながらニヤリと笑った。

「私も吸いますから、大丈夫です」

「そうか、ご同輩か。中々止められないねえ。フフフフ……」

「本当ですね。ハハハハ……」

「ところで、松田の死で疑問に思ったことがあるンだが、教えてもらえますか？」

野村は自分のタバコにZIPPOで火を点けて、張が咥えたタバコに火を近づけながら訊いた。

「あつ、すみません。ええ、もちろん。私でお答えできることでしたら……」

奥の席を選んだが、だいぶ客が増えてきたようで、すぐ隣の席も埋まった。

その客は、携帯電話を取り出すと、辺り構わずデカイ声で話し始める。

「すみません、騒々しくて。まったく、中国人はマナーが悪くって……」

「気にしなさんな。日本人だって、同じようなモンさ。特に若い連中なんざ、遠慮も会釈もねえよ。まったく、とんでもねえ世の中になっちゃった」

野村は普段の“はすっぱ”な、物言いになっていた。

「まあ、そんなことはどうでもいいやな。ところで、その一緒に死んでいたって女の子、うん……ファン？ ファン、リーさんか。で、二人はそんな関係だったのかい？ どうも、俺には納得できねえンだが……」

「松田さんとカラオケをご一緒したとき、一度会ったことがあります。ただ、そこまでの関係だったとは知りませんでした。……そう

いえば以前、あの子は可哀想な生い立ちなんだよなあと言って、ちよっと悲しそうな表情をしたことがありました」

「ふ〜ん……、それはまた、どうしてだい？」

「幼いときから両親と離れて暮らしているのですよ。中国にはそんな子供が沢山います。まあ、ゆうなれば改革開放時代の下放の犠牲者です」

「下放？」

「ええ、古い文化や学問が否定されて、当時の文化人や学生たちが労働力として農村へ送られました。幸い私はその後の世代ですから免れましたが、そういった人たちは随分苦労したと聞いてます」

中国では国籍ではなく、都市の戸籍が重要だ。

例えば、都市の戸籍を持たない者は、余程優秀でない限り、都市でまともな職業につくことは不可能と言える。

それで都市の戸籍を取らせるために、両親は血縁や姻戚を頼り、我が子を大都市に送り出すが、これも悲しい別れだ。

豊かさで両親の愛情、どちらが子供にとって大切だろうか……。

中国の地方、特に内陸部を見ると、一概に両親の愛だと言い切れない気がする。

「ふ〜ん……、まあ、中国も色々あったわけだな。ところで、張さんが一番近くにいたわけだよな、あいつの」

「まあ、そうですが、……夜まで一緒にいたわけではありませんからね……」

「そりゃそうだ。それじゃ、気持ちわりいもんなあ。そのなんだ、ファンさんの友達っていうか、仲の良かった人を知らねえかい？」

「さあ、私もそのカラオケには、一度しか行ったことがありませんので、そこまでは……」

「そうか、そのなんとかって店へ連れて行ってくれねえか」

「カラオケ“夕月”です。いいですよ。ちよっと電話をしてみましよう」

「夕月たあ、洒落た名だ。番号は知ってるのかい？」

「ええ、良い店をチェックしておくのも私の仕事です。日本からのお客様は……」

「美味しい飯と小姐か」

「ハハハハ……、仰る通りです」

4

張は携帯電話を取り出すと、出た相手に何事かを告げた。

「今のが上海弁ってやつかい？」

「そうです。わかりますか？」

「学生のころ、少しは北京語を齧ったんだが、今のはまったくわからねえな」

「ハツハハハツ…、プートンファー（普通語）とは全然違いますからね。訛りなんていうものじゃなくて、まったく別の言葉ですよ。他に広東語っていうのもあります、これは私もわかりません」

「まったく中国は広いや。そこに訛りが加わったら、お手上げだ。おおっと、横道に逸れちゃった。で、なんだって？」

「マネージャーの話ですが、汜莉はほとんど他の小姐たちとは付き合いがないそうです。どこに住んでいるのかも知らないそうです。まだ死んだことも知らない様子でした」

張は肩をすぼめた。

「ふーん、そうかい。ええと、次はなんだっけ？ あ、そうそう、靴だ、靴。あれかい、こっちじゃ、自殺するとき、ベッドの上でも靴を履くのかい？」

「えっ？ 私はまた、日本の習慣かと思っていましたが、違うんですか？」

「いや、まあ、俺も死んだ経験がねえから、よくは知らねえけど。ベッドの上で靴を履いたまま自殺ってのは、聞いたことがねえな。ふーん……」

と首を捻った。

「変ですね。中国でも日本でも習慣がないってことは、……誰かの勘違い？」

野村は、張は頭の良い男だと思ったが、それには応えず、

「最後になるが、松田は、携帯電話を持っていなかったのかい？」と訊いた。

「いえいえ、とんでもありません。中国で携帯電話がなかったら、それこそ仕事になりません。あの日の朝も、私が確認の電話を何度も入れましたから」

「呼び出し音はあったのかい？」

「はい、ありました」

「警察の荷物の中になかったんだよねあ。もう一度、電話を入れてみてくれないか？」

「そうですか、気がつきませんでした。ちょっと待ってください」と言って張は、直ぐに松田の携帯に電話を入れる。

「……おかしいなあ……、まったく反応がありませんねえ。この間は確かに、呼び出し音がしたんですけど……？」

「なんの反応もねえのかい？ 電源が入ってなくても、バッテリーがなくても、なんらかの反応はあるんだろう、こっちの携帯も？」

「ええ、もちろんです。家にあるんじゃないでしょうか？」

「いや、警察でも訊いてみたが、部屋にはなかったそうだ」

「そうですか……会社の机の中も探してみます」

「そうしてくれ。それにロッカーの中とか、考えつくところは、全部探してみてください」

「はい、わかりました。後ほど電話をします」

張は眉間に皺を寄せて考えている。

「……まあ、処分されちゃったと思って間違いないだろうが……。ということは、自殺じゃねえってことは確かだ・・

野村は呟いていた。

「張さん、俺は一旦日本へ戻らなけりゃなんねえが……。用事を済ませたら、休暇を取ってこっちへ戻って来るから、協力してもらえ

るかい？」

「はい、協力もなにも、私も徹底的に調べないと気がすみません」
翌々日の午後の飛行機で、野村は遺体と松田の妻子とともに帰国した。

その晩、張から、

『色々探して見ましたが、松田さんの携帯電話は、やはり見つかりませんでした』

との電話連絡が入った。

「通話記録は取れるのかい？」

と野村が尋ねたところ、

『事件性があれば取れますが、公安が自殺と断定している以上、難しいかも知れません』

との返事だったので、

「なんとかなんねえのかい？」

と野村が問うと、

『手は尽くしてみます。なにかわかったら、また電話します』

と張は応えて電話を切った。

二日後、松田の葬儀に参列した野村は、

・・俺が必ず真相を暴き出してやるからな。悔しいだろうが、少し待ってくれよ・・

と松田の墓前に誓った。

二、第一発見者

1

松田の遺体は、部下の張小平によって発見された。

その日、松田は始業時間になっても会社に来てなかった。

今までそんなことはなかった、松田は誰よりも早く出社するのが常

だった。

張は松田のマンションに電話を入れたが、むなしく呼び出し音が響くだけだった。

携帯にも入れてみたが、やはり松田は出ない。

その日に限り、張はなにか嫌なモノを感じたと野村に言った。

それで張は本部スタッフに、様子を見に行くといい残し、松田のマンションへと向かった。

通常であれば会社から出租汽車で十五分ほどの距離だが、出勤時間帯ということもあり、到着するのに二倍の三十分を要した。

その間何度も電話を入れてみたが、やはり松田は出なかった。

張の不安はドンドン膨らみ、運転手に急げ、早くしろと何度も声を荒げていた。

マンションに到着した張は、慌しく何度もエレベーターのボタンに触れた。

松田の部屋はマンションの十五階、部屋の前に立った張がベルを押した。

だが、反応はない。

少し間を置いてもう一度押した。やはり反応はない。

耳を澄まし、部屋の中の気配を窺ったが、物音一つしない。

張は一階のガードマンの詰め所へ戻り、

「松田が今朝、ここを出るのを見かけたか？」

と質問すると、ガードマンから、

「いや、朝からずっとここにいるが、今日は見ていない。松田の顔はよく知っているし、必ず出かけるとき挨拶をするのでわかる」

との答えが返ってきた。

それで張は、合鍵で部屋を開けるようにとガードマンに頼んだ。

しかし男は、

「上司の許可をもらわないと開けることはできない」
と言って応じようとしなない。

張は黙って男に二十元札を渡した。すると男は、

「このことは、誰にも言うな……」

と何度も念押しをしてから、合鍵を持って張の後について来る。入り口に立った張はもう一度イヤホンを強く押したが、

『ピンポーン、ピンポーン……』

と室内に空しく響き渡るだけだった。

張は男に鍵を開けるようにと促した。

男が鍵を開けるのもどこかしく、張がノブを捻ると、ガチャツと音がして、ドアチェーンがそれを拒んだ。

2

張はものも言わずドアを思いつ切り蹴飛ばした。

ガーンと音を立ててドアが開いた。

「あッ！ ななな……」

ガードマンが驚きの声をあげた。

張はそれに委細構わず、ゴクリと唾を飲み込むとゆっくりと室内に足を入れる。

そして室内を隈なく見廻し、台所を覗き、トイレ、浴室と次々に覗き込んで行ったが、張の頭には、最初からここの予感があった。

ガードマンも異様な雰囲気を感じたようで、黙ってついてくる。

ベッドルームのドアは硬く閉ざされていた。

ノブに手をかけたが、張は躊躇いを覚え、大きく深呼吸をしてから、ゆっくりとノブを捻り、ドアを室内に静かに開け放った。

室内はシーンと静まり返り、窓がカーテンで覆われている所為で暗かった。

張が手探りでライトのスイッチを押すと、パチンと乾いた音を立てた。ライトはチカチカッと瞬き、一瞬の間を置いてから、パツと閃光を放って、室内を明るく照らし出した。

眩しさに張は一瞬視力を失ったが、瞬きをして、ゆっくり薄目を

開けると、ベッドの上の掛け布団が盛りあがっている。

・ ああ、やっぱり・

張は信じたくはなかったが、最悪の予感が当たってしまった、と感じた。

恐る恐る足元から枕へ視線を這わせると、掛け布団は徐々に人の形を現してくる。と、

「どうだ、居たか？ ……あッ！」

覗き込んだガードマンが叫び声をあげ、

「公安を呼んで来る」

と言いつ残して、慌てて部屋を飛び出して行った。

独り残された張は、ベッドの上に、二人横たわっていることに気づき、想わず息を呑む。

張が窓に寄ってカーテンをサツと開け放つと、夏の太陽の強い日差しが部屋の中に鋭く射し込んだ。

窓の外に目をやると、前を流れる“ファン・ブー・ジャン黄浦江”の川面がキラキラと輝いている。

そこを何艘もの船が行き交い、ポンポンポンと長閑な音を響かせていた。

それからようやく張は身体を廻して、ベッドに横たわる二人の顔を確認した。

男は松田だ、間違いない。だが、隣の女は、

・ 誰だ、どこかで会った様な気はするが……？ 思い出せない。

それにしても、なんと穏やかな死に顔だ・

張は意外なほど落ち着いて、二人の顔を観察していた。

松田が会社に出て来なかったときから、なんとなく、この場面を想像していた気がする。

・ しかし、まさか、女が一緒だったとは……

それは張にとっても意外なことだった。

・ あっ、あのときの小姐だ・

突然思い出した。

・そうだ、あのとき、確か松田の隣に座っていた・
張は松田に心酔し、尊敬もしていた。また、
・松田さんは俺を信頼し、頼りにしてくれている・
との自負もあった。

自然と張の頬を大粒の涙が伝わった。

パトカーと救急車のサイレンの音が、交わりながらマンションに近づいて来る。

それで我に返った張は、ハンカチを探し出し、ベッドに横たわる二人の顔を覆った。

3

現場検証が行われ、張は顔へハンカチを掛けたことをきつく咎められ、他に触れたものはないかと、何度も問い質された。

遺体は公安局（警察署）の霊安室へと運ばれて行った。

それからの張は大変だった。

日本の本社に連絡し、今後の対応について指示を待ったが、いつになっても回答がない。

名古屋の“丸金食品”から出向して来ている日本人は、三人とも一週間の予定で帰国していた。

だが、本社に電話しても、彼らが日本へ帰国していること自体、誰も知らない。

窓口となっている海外事業の担当者も、上海に来たときは偉そうに振舞うが、なに一つ自らは決定できない。

指示が出て来るまでに、二日を要した。

その間、第一発見者ということで、張は公安から呼び出され事情聴取を受けている。

何度も何度も同じ話を繰り返させられ、公安局を出たときには既に夕闇が迫っていた。

張はとても疲れていたが、従業員の動揺を抑える必要があると考

え、重い足どりで会社へ戻った。

終業時間はとくに過ぎていたが、誰一人帰宅した者はいない。

張小平の顔を見ると、みんなは松田の安否を訊ねた。

悲しい知らせを予測し、既に涙を湛えている者もいる。

松田はその人柄とともに、なによりも中国人の立場で日本本社にモノをいう態度から、現地の従業員にとっても慕われていた。

『私は上海に骨を埋める覚悟で、この仕事に取り組んでいる』

と松田は常々公言していた。

実際、土日も休まず仕事をし、春節や国慶節にも休みなど取ったことがない。

張はそんな松田の態度に心酔し、尊敬もしていたが、ただ健康だけが心配だった。それで、

「松田さん、偶には休暇を取ってください」

と何度も諭したが、

『休んでも遣ることがないよ。俺は会社にいるのが一番楽しいし、それが唯一の健康法だ』

と応えた松田の笑顔が忘れられない。

それで張は、よくマッサージに誘った。松田もこれは気に入った様子で、滅多に誘いを断ることはなかった。

足ツボマッサージを一時間、全身マッサージを一時間というのがいつものコースだ。

横たわると松田はすぐにイビキを掻き始めて、終るまでの二時間ぐっすりと眠る。

・・やっぱり、松田さんは疲れている・・

その様子に、張はいつもそう感じていた。

・・そういえば、最近はマッサージに誘っても来なかった・・

『時々、一人で行っているよ』

と言うのが松田の断り文句で、それならばと安心したものだが、今になって考えてみると、汜莉と一緒にだったのかも知れない。

張は悲しい事実だがと声を潜め、今日あった出来事をできるだけ正確に話して聞かせた。

それを聞いた黄蓉、孫雅萍、趙秋貝たち女性スタッフが、ワァーッと号泣し始める。

松田が可愛がっていた部下たちだ。

その側で、営業部長の陸軍と課長の沈利国が呆然と佇んでいる。その話は本当なのか、と経理担当の林忠良が張に詰め寄った。

しばらく沈黙の後、張は、

「今日はもう帰りなさい。いいですか、動揺しないようにしてください。気をつけて帰るんですよ」

と、何度も念押しをして帰宅させた。

その後、張は自分の席に座り、しばらく放心したように頭を抱え込んでいた。

三、友への誓約

1

二〇〇七年七月初旬の暑い日、上海で死亡した松田幸夫の四十九日の法要が自宅で営まれていた。

そこに一人の若者が弔問に訪れる。

案内された男は仏壇の前に進み出て、正座して焼香を済ますと、再び合掌して、遺影になにごとかを語りかけるように、しばらく頭を垂れて瞑目していた。

その後、膝でにじりながら松田の妻子、居並ぶ親戚の人々に深々と頭を下げて廻った。

その立ち居振る舞いに野村は、若いのに隙のない男だと感心して見ていた。

男は、最後に末席の野村のところへやって来て、軽く会釈をして

から隣に座った。

すぐに住職の読経が始まった。

一時間ほどで法要は終わり、お食事の用意がございますとの親族の誘いを断って、野村が松田の家を後にすると、さきほどの若者が追いかけて来て肩を並べかけた。

「私、松田さんの大学の後輩で、織田実と申します^{まじと}」

と言って名刺を差し出した。

野村もそれを丁寧を受けて、名刺の交換をした。

「ほほう、協同通信の記者さんですか？」

「はい、今は上海に駐在しています」

「上海……？」

と呟いて、野村は湧き出る汗を拭った。

その年の梅雨明けは早く、七月初旬にもかかわらず、ガラガラとした太陽が、コンクリートの路面を強烈に焦がしている。

「それにしても暑いなあ。今年の夏は糞暑くなりそうだ」

真夏に黒の喪服はきつい。

「野村さんは四星商事ですか、松田さんとはライバル企業にお勤めなのですね」

と、織田が名刺に目を落としながら言った。

「ハッハハハッ…、ライバルねえ。……奴とは大学時代からの付き合いだよ」

「えっ、そうですか。私は松田さんの後輩です」

「ん、あんたも東都大かい？」

「はい……ということは、松田さんも」

「そうだ。東都大学の野球部出身だ。アッ、ハハハ……。松田と違って、俺はこっちの方はからっきしだよ」

と言って、自分の頭を人差し指でツンツンと叩いた。

「先輩方のお噂はお聞きしています。お会いできて光栄です。私も野球部でした」

「なんだ、それこそ後輩じゃねえか」

駅へ向かいながら二人は、松田の思い出に話を弾ませた。

野村は上着を脱いでネクタイを取ると、ワイシャツの首のボタンを外してから、袖をたくしあげた。

「ふうう、これで少しは涼しくなった。あんたも脱いじゃいなよ」

「そうですね。あつ、ちよつと待ってください」

と言って織田は、野村と同じ格好になると、道端の自動販売機へ向かった。

2

「コーラでよろしいですか？」

「奢ってくれるのかい、わりいな。じゃあ、その短いコーヒーをもらおうか」

「これですか、ジョージアのエメラルド……マウンテン？」

「そうだ、それだ。昔は缶コーヒーなんて飲まなかったもんだが、最近のは随分マシな味になった」

プチッとプルトップ開けて、一気に喉に流し込んだ野村は、

「うんめーえ」

と一声もらして、

「ところで、あれかい、松田とは上海でも会っていたのかい？」

と尋ねる。

「あつ、ええ、偶然、会社へ取材にお伺いして、話をしているうちに大学の先輩と知りました。それからは、ときどきご馳走になっていました」

「ふうん……。ところで、最近、といっても殺される前だか、奴になんか変わった様子はなかったかい？」

「野村先輩は、松田先輩が殺されたとお考えですか？」

織田がズバリと切り込んだ。すると、

「おいおい、その先輩、先輩ってのは止めてくれよ。俺はあんまり好きじゃねえんだ」

と、松田はそれをはぐらかした。

駅への道は両側が畑で、遮るものはなにもない。昼下がりの強烈な日差しが、ジリジリと二人に襲い掛かってくる。

自分たちの影が地面に焼き付けられ、そのままそこに残ってしまいうような、そんな強烈な圧力が太陽光から感じられた。

真昼の暑さを避けて、道行く人はほとんどいない。

「わかりました。では、野村さんは、松田さんは殺されたとお考えですか？」

と織田が言い直すと、

「ん、俺が、そんなこと言ったか？」

と、あくまでも惚ける野村だったが、織田はそれに構わず、

「野村さん、実はぼくも、そうではないかと考えているのです」
再び切り込んだ。

「……………」

野村は、

・・流石はブンヤだ・・

と思ったが、織田の話には応ぜず黙って聞いている。

「去年の暮れに、花園飯店の“山里（日本料理店）”で食事をしたとき、なにかに悩んでいる様子でした。えっ？　いえ、そのときは、具体的なことは、なにも……。でも、別れ際に、おまえさんの力を借りることになるかも知れない、とおっしゃいました」

「織田さんの力をねえ。……で、その後は会わなかったのかい？」

「はい、残念ですが……。もう一度お会いしていれば、こんなことにならなかったのではと、今でも悔やまれます」

「いや、織田さんが責任を感じることはねえよ」

僅かな会話の中で、野村は織田の人柄を見抜いていた。それで、
「実は……。あの件について、詳しく調べてみてえと思っている。
松田の遺体を引き取りに行った後、すぐに上海へ戻るつもりだったんだが、抱えていた仕事があつてなあ。未だに行けてねえ状態だ。
それでもどうやら片付いたんで、来月には休みを取って上海に行く。」

「どうだ、協力してもらえるかい？」
と切り出した。

3

二人はようやく最寄り駅へ辿り着いた。

「電車は、まだ行ったばかりです。十五分は待ちますよ」

「じゃあねえ、ベンチで待つか」

待合室はなくて、屋根だけがついた吹き曝しのベンチだったが、それでも日陰になっているだけ炎天下よりはマシだった。

「ところで野村さん、さっきのお話ですけど、ぜひ協力をさせてください。先輩が二人もかわっているわけですから、協力しないわけにはいきません」

「クククッ…、それにブンヤ魂が騒ぐンじゃねえのかい？」

「それもあります」

「ここなら…：駅員に見えねえだろう」

と呟いた野村が、キャビンの赤を一本取り出した。

「あつ、あつ、怒られますよ」

「構うモンかい。ふうう…：、うんめーえ。だいたい、てめえたちで売っておいて、吸うな、ってのは、おかしいだろう。ほれ、そこにも、自動販売機があるじゃねえか」

「ハッハハハ…：、そう言われてみれば、そうですね。それじゃ、ぼくも吸っちゃおう、と」

と応じて、織田もマイルドセブンを取り出した。

「上海での連絡先は、名刺に書いてある住所でいいね？」

「はい、携帯番号もメールアドレスも入っています」

「わかった、じゃあ、日程が決まったら連絡するよ」

野村は途中駅で降りようとして、

「あ、そうだ。松田の部下の張さん、彼も協力してくれるそうだから、一度会ってみてくれよ」

「張小平さんですね。何度か会ったことがあります」
「そうか、それなら話は早いや。じゃあ、よろしくな」
・松田、頼りになりそうな奴が見つかったぞ。俺が真実を暴いてやる。おまえの恨みは俺が晴らしてやるからな・
と、野村は新たな決意を固めていた。

四、野村 in Shanghai

1

二〇〇七年の八月初旬に、上海浦東国際空港にひとりの男が降り立った。

百八十を優に超える長身で、その胸元は、シャツのボタンが吹っ飛びそうに盛りあがり、半袖から出た二本の腕は筋肉質で逞しい。着痩せをするタイプらしく、五月に松田の妻たちと一緒に、上海へ亡骸を引き取りに来たときは、まるで別人のようだった。

― バカデカイ空港だ、もう直ぐ第二期工事が終ると東洋一の規模になるらしい。

成田空港と同様に、都心から車で一時間ほどの田園地帯にある。その辺りは見渡す限りの地平線と海で、いくらでも拡張工事ができることだろう。

将来的にアジアのハブ空港を狙っていることは間違いない。

男が手荷物を下げてゲートを潜ると、

「野村さん！ こっち、こっち」
と呼ぶ声がした。

野村茂夫はすぐに、出迎えの人々の中に、長身の織田実と小柄な張小平の姿を見つけた。

「なんだ、迎えに来てくれたのか。張さんまで、悪いねえ」
と言いながら、野村は二人と固い握手を交わした。

張が手配してくれた車に乗り込んだ野村は、早速二人から今までの調査の状況を聞いた。

空港を出たときから、一台の車が、三人の乗った車の後をつけて来ている。

窓には黒いシールが張られ、誰が乗っているのか、何人乗っているのか、外から窺い知ることとはできない。

しかし見る者が見れば、ナンバープレートの色から、それが普通の車でないことに、すぐに気がつくはずだ。

上海市内に向かって高速道路を飛ばしていると、道路脇の高架を走るリニアモーターカーが猛スピードで追いついて行った。

「張さん、あれからなにかわかったかい？」

「あつ、はい。あれから、それとなく色々調べてみました」

「うん、それで？」

「黄蓉、あつ、仕入れを担当している女性ですが。以前、納入価格がおかしいと松田さんに相談したそうです」

「ふーん……。彼女、その辺がわかるのかい？」

「はい、そうです、自分で勉強して物流の国家資格を取った努力家です。それで、以前は合弁相手の丸金食品の関連会社に任せていたのですが、松田さんが、黄蓉さんが資格を取ったのなら、自分のところで遣ろうよと言いまして、去年から切り替えました」

「松田んとこの“双葉物産”と名古屋の“丸金食品”の合弁じゃ、金額もデカイだろう」

「そうですね、かなりの金額です。それで私が松田さんに命じられまして、黄蓉と一緒に内密に調査を始めました。丸金の三人をまったく信用していませんでしたから……」

「あいつも、なにか薄々感づいていたんだな。バカじゃねえからな、奴は」

「はい。松田さんは、これには裏がある、と言っていました。デカイとは言っても、物流費の水増しなんて、高が知れてますからね」

「その裏があることを、奴らは自分で証明したわけだ」

「確かに、人が二人も死んだわけですから、連中の小遣い稼ぎだけじゃないでしょうね」

二人の会話を黙って聞いていた織田が、初めて口を開いた。

「あつ、そうだ。殺されたのは、二人じゃないですよ」

張が織田の言葉を遮るように言った。

2

「二人じゃないって、張さんどうゆうことだい、それは……？」

「その後、公安の人間から聞いたンですが、汜莉は妊娠していたそうです」

「なにーッ！ 奴の子供か……、ますます許せねえな」

と呟く野村の拳は硬く握り締められ、太い腕には青筋が浮き出ていた。

「えっ…、なにかおっしゃいました？」

織田の問いかけに、野村はなにも応えなかった。と、

「野村さん、織田さん……」

助手席から後ろの座席を振り返った張が、顎をしゃくって、二人へ意味深に囁きかけた。

その視線は野村たちに当てられておらず、もっと後方に注がれている。

「えっ？」

と振り返る織田を野村が制した。

「振り返るな。……俺も気づいていたよ、黒っぽい車だろう」

「気がついていましたか、あのナンバーの色は公安関係です」

「それにしても、意外とドジな連中ですね」

「いや、あれはわざとです。我々に対する警告ですよ」

張の言葉が終らないうちに、その車はスウーと離れ、交差点で右折して消えた。

「どんだん尻尾を出してきやがるな」

と言う野村に、

「しかし、公安絡みとは厄介ですね」

織田がボソリと呟いた。

やがて三人を乗せた車は、黄浦江に架かる“盧浦大橋”を渡ると魯斑路、重慶南路と続く高架を走り、延安中路のジャンクションで下りた。

そして淮海中路を西に進み、ようやく茂名路との交差点に到着、そこを右折すると、すぐに、野村のために張が予約してくれた花園飯店だ。

野村はホテルからVIP待遇で迎えられた。張が気を使ってくれたのだ。

「張さん、ありがとうよ」

「いえ、どうってことありません。知り合いがいるものですから、料金も普通の値段です。そうそう、喫煙ルームにしておきました」

「いやいや、なにからなにまで、ありがとうよ」

「とんでもありません。野村さんは松田さんの本当のお友達です。とゆうことは、私にとっても本当の友達ということですよ」

「ぼくは中国人のそうゆうところが好きだな。野村さん、お疲れでしょうから、シャワーでも浴びてきてください。ぼくたちはここで待っていますから……」

エレベーターの前で野村が応じる。

「そうか、それじゃお言葉に甘えて。悪いが、シャワーだけ浴びさせてもらおうよ。明け方まで仕事していたもんだから、身体が汗でベタベタしてな」

「どうぞ、どうぞ、ゆっくり浴びてください」

「なくに、俺はカラスの行水だあな。わりいが、その“オアシス”で、茶でも飲んでいてくれ」

と言って野村は、ボーイに導かれエレベーターに乗り込んだ。

張は友人の役人や公安を使って正攻法で攻め、織田はひよんなことから知り合った乞食のボス妖が属する、裏の世界から調査を進め

ることになった。

野村は集まった情報の分析と、四星商事や関連会社の駐在員からの情報収集である。

その晩、三人は綿密に打合せをしてから、ホテル内の中華レストラン“白玉蘭”^{バイユラン}で遅い夕餉を取った。

酒は決意を固めるために、ほんの少しだけ飲んだ。

野村に与えられた期間は、夏休みとして無理やり取った二週間だけである。

3

翌日から三人は、それぞれ寸暇を惜しんで調査を始める。

新聞記者の織田は比較的自由は利いたが、総経理を失った張は、仕事も忙しく、なかなか時間が取れなかったので、主に終業後に行動していた。

そんな努力が実り、いくつかの有力な情報が集まり出していた。

織田が妖から、日本人に殺しを頼まれたことがある、との情報を掴んできた。

妖の属している組織は、どんな汚い仕事でも金次第で請け負っているとのことだった。

織田の聞き込んだ話では、妖は頼みに来た男たちの態度が、あまりにも横柄だったので腹を立て、その仕事は引き受けなかったそうだ。

事件のあらましを聞いた妖が、

『そんな手際のいい殺しができるのは、あいっらしかいねえな』と呟いたそうだ。

しかし、野村がそれ以上訊いても、裏社会の仁義を枷に、答えられないと言ったそうだ。

「お役に立てなくてすみません」
と詫びる織田に野村が言った。

「ふーん、なるほど。……その妖って人から聞き出すのは、土台無理な話だ。掟を破ると、ああいった世界では、生きていけなくなるからなあ」

「そうですね。日本のヤクザなんかと一緒にしようからね」

「でも、これで繋がったじゃねえか。そこまで訊き出せれば、上等だよ。おまえさんの情報網はすげえな」

「あ、いや、アッハハハ……」

褒められて、織田は照れ臭そうに頭を掻いた。

「きつと綻びが出てくるはずだ」

野村は確信を持った。

二人の話がひと段落したのを見届けた張が切り出した。

「私が入社する前まで、松田さんの通訳をしていた、段建筆さんと会うことができました」

「ほほう……、で、なにか出てきたかい？」

「ええ、去年の五月七日にアポもなく、二人の日本人が松田さんを訪ねて来たそうです」

「五月七日とは、随分詳しいんだね……」

「ええ、段さんはとても几帳面な方で、その日にあった出来事を細かく記録しているのだそうです。本人は松田さんから教えられたと言っていました」

「確かに松田は、俺と違って几帳面な男だった。……ん？　おう、もう一杯もらおうか」

「あつ、ぼくも。張さんは？」

「私はもう結構です」

ボーイがコーヒーのお替りにやって来た。

「それにしてもうるせえなあ」

ホールでピアノにバイオリン、それにフルートを交えた生演奏が始まった。

一応サービスのつもりなのだろうが、生演奏は音量が調整できないだけに、近くに座ると相手の話がよく聞き取れない。

「昼真っからいらねえと思うがなあ……。それにしても下手糞だな」
「近くの音楽学校の学生でしょう」
「そうですか、ぼくは上手だと思っけどなあ……」
「織田よ、おまえさんの耳、おかしいんじゃないのかい？」
と苦笑いした野村が、さっきから口に咥えているキャンビンに火を点けた。

4

「張さん、続きをお願いします」
織田が話の続きを促した。

「はい。その二人は会社には来ないで、近くの喫茶店へ松田さんを呼び出したそうです」

「ふーん……。松田はなんでまた、ノコノコと行ったのかな？」

「なんでもその連中は、丸金食品の斉藤専務から頼まれて来た、と言ったらしいのです。それに、会社じゃ、あんたが困るだろうとも……」

「松田がなにを困るんだ？」

「まあまあ野村さん、そう急かないでください。ねえ、張さん」

「ハハハッ……、松田さんも変だと思ったのでしょうか。それで部下の段健筆さんを一緒に連れて行ったそうです」

段から詳しく話を聞いてきた張によると、そのときの場面はこんな具合だったらしい。

会社の近くの指定された珈琲店に入った松田と段は、奥のソファにドッキリと座る二人の日本人にすぐに気がついた。

松田が二人に近づいて初対面の挨拶をすると、

『オマエが遣っていることを、俺たちは全部知っている』

と、木村啓二と名乗った男がいきなり切り出した。

松田が怪訝な表情をすると、

『俺たちは斉藤専務に頼まれて、オマエたちの調査をするために来

た。知っているだろう斉藤専務は？ 三日前上海に入って、オマエらのことは色々調べさせてもらったよ』

と言ってニヤリと笑った。そして、

『斉藤専務が言うには、物流センターの家賃が高過ぎる、仕入れ価格がおかしい、中国人のマフィアがいて、会社を喰い物にしている。……オマエか、段とかちゅうのは？』

木村が段をジロツと睨んだ。それで松田が、

『木村さん……いったい、なにがおっしゃりたいのですか？』と冷静に応じると、

『このおー、とぼけんじゃねえ。困るンだろう、こんなことが会社の連中に知られたらよお。だから気使って会社へ行かねえで、ここへ呼び出してやったンじゃねえか』

木村は室内をキョロキョロと見廻してから、ドスの効いた声で囁いた。

『別段、会社に来ていただいても、困ることはありませんが……』

と、あくまでも冷静に対応する松田に、業を煮やしたか、

『物流センターを普通の二倍の値段で借りて、差額をちよろまかしているそうじゃねえか。それに業者からリベートも取っているだろう、そののマフィアと組んで……。証拠は拳がっているんだ、惚けてもダメだぜ』

と核心に触れてきた。

『はーあ……？ ……どこで仕入れてきたのかは知りませんが、中々おもしろいお話ですね。帳簿でもなんでも調べてみてください。』

物流センターの家賃相場なんて、直ぐにわかりますよ。我々はむしろ安いと思っているくらいですから、まあ、どうぞお調べください』と松田が皮肉を込めて切り返すと、

『このやろ、とぼけやがって。証拠は拳がっているんだッ！』

と地を出して声を荒げる。それに、

『まあまあ、木村さん。周りの目がありますから……。なあ、あんたたち、どうですか、私たちに任せませんか？ 悪いようにはしな

いから』

もう一人の加藤良三と名乗った男が、静かな口調で諭すように言った。

『加藤さん、お任せするもなにも、お二人の話が私にはまったく理解できません。どこから情報を仕入れたのかは知りませんが、証拠というのを見せていただけませんか？　ここにいる段は上海の不動産状況をよく知っています。マフィアというのは、ちょっと笑ってしまいますが……。ハハハッ……』

と、松田が応酬すると、

『このやろう、下手に出てれば。オマエらがその気なら、この調査結果を斉藤専務にそのまま渡すからな。どうなっても知らねえぞ』

鼻息荒く意気込む木村に段が、

『物流センターの場所は私が見つけたものです。上海市内であれだけの場所は、そうそうはありません。どこの不動産屋にでも訊いてみてください。我々の借りている家賃が適正かどうか、直ぐにわかるはずです』

と冷静に説明した。

『段さん、この人たちにとって、そんなことはどうでもいいことなんだよ。どうしても、我々を悪者にしたいらしい』

『なんだと、このヤローッ！』

木村は目を三角に吊り上げ、コメカミには青筋、顔は怒りで引きつっている。今にも殴りかかってきそうな気配だ。

『木村さん、この連中に話してもムダですよ。あくまでとぼける気らしいから……』

と言う加藤の言葉を木村が受けて、

『よし、わかった。斉藤にこのまま報告するからな、首を洗って待ってろよッ！』

と捨て台詞を残し、席を蹴って、店を出て行こうとする二人に向かって、

『発票（領収書）をお忘れですよ、木村さん……』

と呼びかけて、領収書をヒラヒラさせると、加藤が慌てて戻り、段の手からふんだくるようにして奪い取った。

『段さん、コーヒーでも飲もうか？』

『あ、はい。なんなんですかねえ、あの連中は……。あれはヤクザでしょう』

『斉藤専務に頼まれたとか言っていたな。後で麦沢さんへ電話して探ってみるよ』

『しかしあいづら、なにが目的なんでしょうか？』

『うーん？ ……それになんだってえ、なんだか細かいこと言っていたな。名刺の差額がどうたらこうたら、なんのことだい？』

『業者と示し合わせて、正規の料金に上乗せして、手数料を貰っている、ってことじゃないですかね』

『えっ、あつ……。名刺って百枚で五十元（750円）ぐらいのモンだろう。参ったねえ、どうも……。』

5

「とまあ、だいたいそんな内容だったらしいですよ」

語り終え張がアイスティーを啜った。

「聞くまでもねえと思うが、どうなんだい、その二人が言っていた話ってのは？」

野村は、あり得ない話とわかっていたが張に訊いた。

「口から出任せですよ、野村さん」

と張は言下に否定し、

「ただですね、そのことがあってから、松田さんは色々と調べ始めたってことです」

と言葉を続けた。

「なるほどね、奴らにとっちゃ藪蛇ってわけだ」
と織田が相槌を打つと、

「その斉藤専務とやらは、何者だ？」

野村がたたみかける。

「はい、名古屋丸金食品のナンバー2で、海外事業の責任者です。

“上海双葉丸金食品”の副董事長にもなっています」

「ふくん……、どうもよくわからんな。……松田の性格なら、なにか記録を残しているはずなんだが、荷物の中を、調べて見ちゃくれねえか？」

「ええ、そうなんです……。日本へ総経理の私物を送り返すのに、私が机とロッカーを整理しました。しかし、いつも持ち歩いていた手帳が見当たりませんでした。表紙が茶色の皮でできたやつです」

「ああ、それなら俺も知っている。かなりくたびれたやつだろう。

松田は、もう二十年以上は使っているんじゃないかな」

「ハハハハ……、私も新しいのを買うように、勧めたことはあるのですが、いや、これは大切なものだからと言って、使い続けていました」

「うん、俺も聞いたことがあるよ。なんでも、就職が決まったときに、親父さんから貰ったものらしい」

第二章 love—story（嘘と真）

一、出会い

1

二〇〇五年七月の或る日……、

「松田さんは歌わないんですか？」

「あっ、うん……」

水割りに口をつけまま考え事をしていた松田は、突然声をかけられて驚いた。

「松田さんはいつも、静かに飲んでいるだけですね」

カラオケの小姐、汜莉だ。

「ハハハッ…、今日は日本からのお客様をご招待だからね」

「あの人たちですね」

ミラーボールのクルクル回る舞台上では、三人の日本人と二人の小姐が踊っている。

上司らしき男が歌い、他の二人は、それぞれのパートナーを相手に踊り狂っている。

「おい、松田ぁーッ！ オマエも歌えーッ！」

舞台から男が怒鳴った。

松田はニコニコと笑顔を浮かべて、

「まあまあ……」

という風に手を振って、水割りを頭上に掲げた。

「みなさんお元気ですね。私たちも踊りませんか？」

汜莉が松田を誘う。

「ハハハハ…、否、ぼくはいいよ。水割りを作ってくれる」

「はい。確かダブルでしたね」

「おっ、なんで知ってるの？」

「私、以前にも、松田さんの席に着いたことがあるンですよ」

「えっ、そうだったっけ？」

「あゝあ、どうせ私は美人じゃないし、日本語も下手だから、印象が薄いンです……」

少し拗ねた格好をした。

「ごめん、ごめん。汜さん、だったね。とても日本語が上手だよ」
「日本語だけですか？」

「あっ、いや、とても綺麗だ。それにとっても賢そうな顔付きだ」

松田は、汜の顔をまじかに見て、とても整った顔をしていることに気が付いた。

「ウフフッ…、ありがとうございます。お世辞でも嬉しいですよ」

「いや、お世辞じゃないよ」

松田はテレながら慌てて否定した。

「まゝあ、松田さんたら……」

汜莉は、しばらく松田と話しを続けるうちに、その誠実な態度に好感を持った。

松田たちは二時間ほど過ごし、午後の十時を少し回ったところで店を出て行った。

外まで送り出し、松田の乗ったタクシーを見送った後、汜莉は、

・あの人を罫にかけるなんて、私にはできない・

と、心の中で呟いていた。

夜十時を過ぎたとはいえ、上海の真夏の蒸し暑さは少しも和らぐ心配がない。

――暑さは時として、人間の思考を狂わす。

2

一週間ほど前、汜莉は店のマネージャーに、給料の前借りを申し入れた。

田舎に住む父親の手術代として、一万元ほど必要になったのだ。

しかしマネージャーは、いい顔をしなかった。

『君らは明日いなくなってしまうかも知れない、そんな連中にお金を貸すことは出来ない』

というのが理由だった。

汜莉は兵馬俑で有名な西安の農村部の出身、すでに祖父母は亡くなり、上海に頼れる親戚はいない。

困り果てた汜莉に、同僚の張英が囁きかけた。

「ねえ、お金が必要なんだって……」

「えっ？」

「ううん、マネージャーから聞いたの……。総経理はケチだから、前借りは無理だって。貸してあげたいんだけど、ってマネージャーが言っていたわ」

「……………」

普段あまり接点のない張英に突然話しかけられ、汜莉は戸惑っていた。

「ねえ、汜莉……、いい仕事を紹介してあげようか？」

「えっ、いいお仕事……、でも……」

「ウフフッ……、勘違いしないで、売春じゃないわよ」

張英が汜莉の懸念をズバツと衝いた。

「あっ、えっ……」

「フフッ……、ご安心なさい。お店に来る或る日本人と、お話をしてくれるだけでいいのよ。それで五万元、どお、悪い話じゃないでしょう」

汜莉の気持ちを和らげるように優しく言った。

「日本人、と……」

「大丈夫よ、日本人もいろいろだから。それに、このお店で日本語が一番上手なのは貴方ですもの」

「でも、お話するだけで……？」

「もちろんそれだけじゃないわ。うんと親しくなって、或ることを聞き出して欲しいの」

やっぱりと言いかけて、汜莉は口をつぐんだ。

「ウフフッ…、うんと親しくと言っても自由恋愛よ、自由恋愛。セックスをするかどうかは貴方の判断。嫌なら、必要なことを聞き出して、逃げちゃえばいいのよ」

「でも、どんなことを聞き出すの？ 私にはできないわ」

「大丈夫、絶対できるから……。それにお金が必要なんでしょう」
「でも……」

「大丈夫、できる、できる。……それじゃ、これが手付けの一万元（約15万円）、残りは成功してから渡すそうよ。はい」
と言って、分厚い封筒を手渡された。

「えっ、でも私……」

一度は拒絶を試みたが、父親の顔が脳裏に浮かぶと、汜莉はその封筒の厚みに負けた。

「はい、これがその人の写真よ」

と、一枚の写真が手渡された。

「あら、この人」

汜莉は、写真の男を、お店で何度か見かけたことを思い出した。

「貴方も会ったことがあるはずよ。なかなか渋い男よね。私の好みなんだけど、ウフフッ…。ほら、私には今彼氏が居るから……」

張英の話では、予約が入っていて、写真の男は三日後に来店する予定とのことだった。

3

数日後……、

「どうやら、上手く接触が出来たようね」

張英が着替え中の汜莉に、ロッカールームで話しかけてきた。

「えっ、ええ……」

「どう、お父さんの具合は？」

「来週には手術ができることになりました」

「そう、良かったじゃないの。はい、これ」
「えっ？」

手渡された封筒の具合から現金だとわかった。

「お金、必要でしょう。一万元、入っているわ。残りの三万元は成功してからよ」

「でも……」

「いいのよ、お願いしたことをちゃんと遣ってちょうだい。そうしないと、私にもとばかりが来ちゃうから……」

「張英さんにとばかり？」

「ハハハハ……、冗談よ。とにかくお願いね。どんな些細なことでもいいから、彼の話は全部私に伝えてちょうだいね」

「はい」

「少し間をおいて電話するといいわよ。相談があるとか言ってね。休みの日にデートに誘いなさい。日本の男はもてたと思って、必ず来るから、ね」

とウインクをして、汜莉の肩をポンと叩いた。

日本からの客を連れて“夕月”訪れた一週間後に、机の上で松田の携帯が暴れた。

「? (wei)、? (wei)」

『もしもし、松田さん、ですか?』

遠慮深げに電話の相手が尋ねた。

「はい、松田ですが?」

『突然のお電話、申し訳ございません。汜です、夕月の汜莉です』

「あっ、汜さん」

別れ際に名刺を渡したとき、松田はこの場面があることを密かに期待していた。

『ごめんなさい、お仕事中に電話して……』

「あ、いえ、大丈夫です。一応個室ですから」

と応じたが、声を潜め、開け放ったドアを閉めに立ち上がった。

『あのー、今日……、お店へお出でいただけませんか? あのー、

お話が、あって……。いえ、ご無理でしたら結構です』

「今日……。大丈夫です」

松田は、夜の業者との食事をキャンセルすることにした。

『本当ですか？』

「ええ、お伺いします」

『嬉しいわ』

「ほくの方こそ、お電話をいただいて、とっても嬉しいです」

と応えながらも、松田はなにか引っかかるものを感じていた。

・話があると言っていたが……。いったいなんだろう？ まあ、虎穴に入らずんば虎子を得ずと言うからな・

なんとなくあの日から、汜莉のことが気になっていたのも、事実だった。

松田が席に座ると、すぐに汜莉がやって来て隣へ座った。

水割りを数杯飲んで、

「ところで、話ってなに？」

と松田が切り出すと、汜莉は少し間をおいて、

「……ただ、お会いしたかった、だけなの……」

と答えてポーッと頬を染めた。

「えっ、あっ……」

その言葉は松田の心を揺すった。

一時間ほどを過ごした松田が、

「そろそろ帰るから……」

と、遠慮深げに伝えると、

「えっ、あ、はい……」

松田は、汜莉に、なにかホッとした様子を感じ取っていた。

タクシーへ乗り込み際に、松田がデートを申し入れると、汜莉は笑窪を浮かべて微笑み、頬を染めてコクリと頷いた。

・ああ、とうとう賽を投げてしまった。父の手術費用のためとはいえ、こんなことして……。父が喜ぶはずがないわ・

ぼんやりと歩道にたたずむ汜莉の目の前を、忙しくタクシーが行

き交っている。

・子供のころから、どんなに貧しくても曲がったことだけはするな、と教えられてきたのに……。お父さん、ごめんなさい。でも、私はどうなってもいい。お父さんさえ助かってくれれば・

敬虔なクリスチャンの汜莉は、十字を切って神に許しを請うた。

・やはり、あの態度はなにか不自然だ・

松田はタクシーの中で疑念を口にしていた。

二、楽しいデート（浦東野生動物公園）

1

二〇〇五年七月下旬の日曜日、汜莉との約束の日……。

松田は当日になっても悩んでいた。若い女性がなにを喜ぶのか、松田には皆目検討がつかなかったのだ。

どこへ行こうか思案の末、ようやく自分も常々行きたいと思っていた“浦東野生動物公園”を思いついた。

待ち合わせ場所は、淮海中路に面した“襄陽公園”の入口付近、時刻は十時と決めてあった。

松田は久しぶりのデートに胸が騒ぎ、前日の晩はよく眠ることができなかった。朝方少しウトウトして、午前五時には目が覚めた。

睡眠不足で朝を迎えたが、喜びがそれを上回っていたので、少しも苦には感じなかった。

約束の時刻が待ち遠しくて、何度時計を見たことか。だが、針は遅々として進まない。

ソファで横になったり、縦になったりと落ち着かない。唯一映る日本語放送、NHKニュースも耳に入らない。

それでもなんとか時計の針が九時を指したので、松田は勇躍部屋を出た。すでに真夏の太陽が照り付けている。

襄陽公園までは、松田の家からだとかクシーで十五分ほどの距離だが、時間潰しに歩いて行くことにした。

上海特有の茹だるような暑さだ。たちまち汗が噴き出し、すぐに松田は歩き始めたことを後悔した。

プラタナスの生い茂る路を選び、焦る気持ちを抑えてゆっくりと歩を進めた。それでも、約束の五分前に公園の入口に到着した。

松田は、プラタナスの木陰に、人目を避けるようにたたずむ氾莉の姿に気づいたが、すぐには近づかず探す振りを装った。

氾莉の服装は、身体にフィットしたジーンズとTシャツ、簡素なものだったが、清潔感に溢れており、松田にはとても好ましく感じられた。

プラタナスの幹に寄りかかり、一心不乱に本を読んでいる。松田はそっと近づき、やあ…と小さく声をかけた。

すると、氾莉はサツと顔をあげ、落ち着いた様子で、こんにちはと日本語の挨拶を返した。

松田は少し顔が上気するのを覚えた。

・・こんなところで話をしていると、いつ何時知り合いと会わないとも限らない・・

と松田は考え、目の前の信号に停まったタクシーに手を挙げた。運転手がコクリと頷いたので、松田は後部座席のドアを開け、氾莉に乗るように促した。

氾莉は、えっ、でも、どこ…と言いかけたが、松田の意図を見抜いたようで、シートに深々と身を沈めた。

2

松田が照れながらその日の予定を説明すると、氾莉は、

「嬉しい。一度行ってみたかったんです」

と顔を輝かして応じた。

途中で一度迷ったが、小一時間で浦東野生動物公園に到着した。

入場料は一人五十元（約750円）と、かなりの値段だ。それを聞いた汜莉は、

「很貴（まあ、高い）」

と呆れたように呟いた。

日曜日ということもあるのだろうが、それでも園内には沢山の人がいる。

入場門を潜るとそこは広場になっていて、視界がパッと開けた。

広場を縦断して真っ直ぐに伸びた歩道を進んで行くと、突き当りで二股に分かれる。

その境目に大きな隕石が置かれていた。

「ほんもの？」

「さあ、ここは中国ですから。ウフフツ…」

笑うと右の頬に笑窪ができる。

・・・可愛いな・・・

正面はフラミンゴの池になっていて、沢山のピンクの花が咲いている。松田が、

「あの鳥はフラミンゴ」

と名前を告げると、汜莉は、

「よくご存知ですね」

と驚きの表情を浮かべた。

それで気をよくした松田が、目についた花や鳥の名前を次々にあげると、汜莉はその度に感心した様子を見せる。

右に進むと植物公園、左に進むと野生動物園だ。動物園までの長い距離を、二人は冗談を言い合いながらゆっくりと歩いた。

・・・うーん、いい雰囲気だ・・・

松田はデートの前まで心配だった。

会話が続き白けてしまったらどうしようと、ずっと考えていたのだ。

しばらく歩くと広いバス乗り場、そこには二百メートルほどお客様の行列ができていた。ここでもう一度、入場券を買わなければな

らない。

「私が買ってきます」

と言って、汜莉が売り場へ向かうとしたので、松田がお金を渡そうとすると、

「大丈夫です、お金ならあります」

と断って受け取らない。

だが、金額を見ると五十元、汜莉にとっては大きな金額だ。それで無理やり百元を渡すと、渋々受け取った汜莉が、入場券を携えて戻って来て、

「ありがとうございます」

と松田に向かって頭を下げた。

三十分待ちだという。

「じゃあ、一時間待ちだな」

と松田が言うと、汜莉が、ウフツ…と小さく笑った。

順番を待つ間、二人の会話は太いに弾んだ。

・よくし、いいぞ。この調子だ・

松田も饒舌になっていた。汜莉も楽しそうに応じてくれる。

予想通りに一時間ほど待たされて、ようやく順番が回ってきた。

十数名の客が一齐にマイクロバスに乗り込む。汜莉は窓側の席を確保し、松田に、早く、早くと促した。

小さな座席だったので、並んで座るとお尻が接し、剥き出しの腕が触れ合う。

松田は座った瞬間に汜莉の肉感を感じ、しばらくすると体温も伝い始める。それで、下腹部がムズムズと騒ぎ出した。

3

動物の種類ごとに放し飼いにされているエリア内の道を、バスは動物たちを前後左右に眺めながらゆっくりと進んで行った。

最初に入ったのは熊のエリア、初夏のウララカな陽気の中、あち

らこちらで熊がのんびりと寝そべっている。

「松田さん、あれ、あの変な熊は？」

「あの不細工な奴ね、あれはマレー熊ってゆうの」

「アッハハハ……、変な熊」

愛嬌のあるデカイヒグマがバスに近づいて来た。そして、餌を要求するために立ち上がり、バスの窓に前足をかけると、その近くの客が嬌声をあげた。

汜莉も大喜びで、

「見て、見て。松田さん、見て」

と言って、キャツキャツキャツ…と笑い声を立てている。

本当に楽しそうだ。松田はその姿を見てとても嬉しかった。

やがて、映画のジュラシックパークで見たような、二重扉の門が出てくる。一枚目の扉が開いてバスが入ると、後ろの扉が閉まり、続いて前の扉が開けられるのだ。

そこはライオンのエリアで、ちょうど食事の時間らしく、大きな肉の塊にライオンたちが群がっている。

しかし、十分に餌を与えられている所為か、どのライオンも動きは緩慢だ。餌にはまったく見向きもせず、デレッと寝そべっている輩もいる。

「人間も動物も、あまり満たされ過ぎてもしけないな」

松田が呟くと、汜莉は次々に、

「あそこ、ほら、こっちと」

松田にライオンを見るように促す。

無邪気な汜莉の姿に、ここを選んでよかったと、松田は独り悦に入っていた。

同じような二重扉の門を潜ると、今度は虎のエリアだ。こちらは食事の時間が終わったらしく、木陰でのんびりと昼寝をしている。

生い茂った夏草が邪魔になって虎がよく見えないと、乗客から不満の声があがった。

バスの外に出ると言い出すバカな客もいて、それを運転手がきつ

く制した。

運転手の説明によると、以前ドアの隙間から車を降りてしまった孫を、連れ戻そうと追いかけたお婆さんが、トラに咬まれて死亡する事故があったそうだ。

遠く離れていてもアツという間に襲われる。のんびり寝ているように見えても、トラやライオンの瞬発力は想像以上のことだ。

いつだったか忘れたが、日本の芸能人がケニアの草原でライオンに襲われたと、ニュースになったのを松田は思い出した。

「あらあゝ、もう終わりですって……」

と、氾莉が不満気に松田に告げる。

たった二十分ほどの行程だった。松田は、氾莉ともう少し並んで座っていたと思った。

下腹部が少し突っ張っているので、松田は最後にバスを降りた。

4

野生動物園の見学は、予想以上に短時間で終わってしまったので、さて、次はどうしようと悩みつつ辺りを見廻すと、トイレの二文字が目飛び込んきた。

その隣がレストラン、実に効率的な配置だ。

「なにか食べようか？」

松田は氾莉に提案した。

「そうですね。実は私、朝食を食べてないんです」

と言って氾莉は、ペロッと舌を出した。

「実はぼくも。へへヘッ……」

君と会うのが嬉しくて、とは言わなかった。

「そうですか。じゃあ、私をご馳走します。でも、松田さんのお口に合うかしら……？」

「大丈夫、ぼくはなんでも食べられるよ」

松田は昼食に、従業員と同じ五元の弁当を食べていた。

それは別に無理をしているわけではなく、本当に美味しいと思って食べている。

「さあ、どれにしますか？　とは言っても、二種類しかありませんけど。あら、麺もあります。カップ麺ですけど」

「汜さん、君はどれにするの？」

「そうですねえ…、私はこの豚肉の入った弁当にします」

「そうか、じゃあ、ぼくはこっち」

「飲み物もどうですか？」

「そうだねえ……、そのお茶をもらおうかな」

と、松田はペットボトルを指差した。

ちょうど昼食時なので、レストランは客でごった返している。

「ほら、あの角。あそこが空いていますから、座りましょう」

汜莉はサッと移動した。そして、

「早く早く。松田さん、早く」

と急がせる。

「直ぐに割り込まれます。中国人に遠慮なんかしていたら、いつになっても座れませんよ」

確かに、タクシーでもなんでも、中国人は並んで順番を待つということをしない。

汜莉は先ず場所を確保してから、

「ちょっと待ってください」

と、ティッシュペーパーを取り出し、松田のイスを拭い、次いでテーブルの上を拭いた。テーブルには、前の客の食べ残しが散乱しているのだ。

「さあ、どうぞ」

「ありがとう」

二人は並んでイスに座ったが、今度は身体が触れ合わなかった。

「総経理のは魚ですね。魚は好きですか？」

ぶつ切りにした青魚のとても大きな切り身だったが、一度揚げてある所為で、川魚特有の臭みはない。

「そうだね、肉も好きだけど、どっちかというと魚かな」

「この肉も美味しいですよ」

と言って汨莉は、大きな肉の塊を箸で千切ると、松田のご飯の上に乘せた。

中国人はオカズを自分の箸で摘んで、平気で他人に渡す。

松田も初めのうちは、その行為に抵抗感があつた。だが、昼食時に従業員と、オカズのやり取りをしているうちに慣れた。

そもそも中華料理に取り箸はつかない。出された料理をお互いの箸で突つつき合うのが普通だ。

松田がテーブルの上にこぼした野菜を、箸で摘んで口に運ぼうとすると、

「ダメッ！ ダメですよ、汚いから捨ててください」

と汨莉が慌てて制した。

汨莉は口に含んだ豚肉の骨などを、テーブルにペツと吐き出す。

これも中国人にとって普通の仕草だ。

松田も同じように、魚の骨をテーブルの上に吐き出した。

5

午後は、入口近くの分かれ道まで戻って、植物公園内を散歩することにした。

こちらは無料なので、人も多い。

芝生の上で弁当を広げている家族連れも沢山いる。

公園は植物園になっていて、多種多様の草木が植えられている。

温室もあり、中の池には小さなワニが飼われている。

薔薇の花で作られたトンネルを歩きながら、松田がサツと左手を腰に当てた。すると、汨莉は一度目のデートのときと同じように、ごく自然に右手を差し入れる。

腕を組むと、松田の歩き方は緊張でぎこちなくなつた。半袖なので直接肌が触れ、それでまた下腹部がムズムズと騒ぎ出したのだ。

・もしかしたら、俺に気があるのかも知れない。ムフフフツ……
中国人にとっては、これも極めて自然な行為と言える。父親と娘、
母親と息子が手を繋いで散歩している姿を街中でもよく見かける。
女の娘同士でも仲良く手を繋いでいる姿を見るが、流石に男同士は
見たことがない。

次々に現れる草木の名前を告げるたびに、

「まあ、凄い。松田さんは、なんでもご存知なんですね」

と汜莉は、大げさに感心した素振りをする。と、汜莉の携帯電話
の呼び出し音が鳴った。

汜莉は松田から少し離れた場所で話を始めた。

・おっ、彼氏からかな・

五分ほど話してから、松田のところへ戻って来た汜莉が、

「同僚からの電話です」

と言って、少し顔を曇らせたのが松田は気になった。

野生動物公園を出て時計を見ると、針は二時を指している。

「まだ、時間が早いね。水族館へ行ってみようか？ あっ、お店は
大丈夫なの？」

「ええ、今日はお休みを取っていますから……。日曜日はお客様が
少ないんです」

「そうか、会社が休みだものね」

「はい、だからお客様が少なくて。ところで、水族館の場所をご存
知ですか？」

「うん、わかるよ。浦東のテレビ塔、“東方明珠”の裏側だろう」

公園の入口付近でたむろするタクシーを拾い、二人は“浦東国際
水族館”へと向かった。

三、楽しいデート（上海海洋水族館）

この辺り陸家嘴地区は、ほんの十五年ほど前までは寂れた漁村だったが、現在は金融街に生まれ変わり、超近代的な高層ビルが林立している。

八十八階建ての“金茂大厦”の隣で、日本の森ビルが“環球金融中心”という、百一階の高さを誇る超高層ビルを建設中である。

完成は二〇〇八年八月ごろの予定で、現在中国一の高さを誇る隣の金茂大厦を軽く凌ぐことになる。

向かいの“浦西”側は有名な“外滩”で、通称“バンド”だ。

昔はフランス租界、その名残でヨーロッパ風の建築物が、黄浦江の岸沿いを、数百メートルにわたって建ち並んでいる。

ひと際目立つグリーンの尖がり屋根の建物が“和平飯店”、有名な老舗の高級ホテルだ。

一階のジャズバーは、今でも“老上海”の雰囲気を残している。

高齡のミュージシャンたちで構成されていて、激しさはないが、自ら陶醉したように演奏する姿が印象的だ。一夜、バーボンを片手に、老上海に想いを馳せるのも一興だろう。

松田は浦東側から見るバンドの夜景が好きだった。ライトアップされたその景色は、そこが上海ということを忘れさせる。

但し昼間は、黄浦江の汚さと、歴史的な建造物にもかかわらず、テナントとして入居している飲食店やファーストフード店の、派手な看板に白けさせられる。

日本では、まず考えられない光景である。

― これも拝金主義の賜物か……。

「ウワァーッ！ 流石にここは人が多いねえ。観光客は記念撮影に一生懸命だ」

中国人は写真が大好き、恥ずかしげもなく、一々ポーズを決めて撮るので時間がかかる。

「“東方明珠（テレビ塔）” 目当てのお客さんです。観光客は、ここ南京路へは必ず行きます。あ、そうそう、“豫園”へもね」

「豫園は、日本でいえば浅草だな」

「アサクサ……？」

「うん、東京の古い町だ。浅草寺というお寺があって、それを囲むようにして、周りお土産物屋が沢山あるんだ。偶に行くなら面白いスポットだけど、東京の人はあまり行かないな」

「私、東京へ行ってみたい……」

汜莉は東京に想いを馳せたのか、遠くを見詰めるような眼差しをした。

「そういえば、観光客の顔つきが少し違うようだし、それに小柄な人が多いね」

松田は話題を変えた。

同じ漢民族でも、大都会の人々と田舎の人々では、明らかに体格が違っている。

こう言っでは失礼だが、服装もなんとなく野暮ったい。

「食べ物の所為かもしれません。中国は、都会と田舎では貧富の差が激しいから……。私の家族も……貧しくて……」

汜莉は声をおとし、目には薄っすらと涙が宿った。

「……………」

松田には返す言葉もない。と、

「すみません。思い出してしまって……」

と手の甲で涙を拭った。

「苦労したんだ……」

「……私の人生、楽しいことはありませんでした、今まで……」

と言って汜莉は、松田の神妙な顔を見あげた。

2

時刻は三時を回っている。

「おいくらですか？」

「百十元だって、けっこう高いね。これじゃあ、田舎からの観光客

にはきついでしよう」

「フフフッ…、彼らは別料金ですよ」

「えっ、まだ二重価格があるの？」

ほんの数年前まで、どここの観光地の入場料も二重価格だった。

「豫園の入場料も、以前は外国人と中国人では違っていたよ。北京の“故宮博物館”^{グウ・ゴン}もそうだった」

「そうなんですか？ 私、そうゆうところへ行かないから、知りませんでした」

十年数年前までは、外国人の使う紙幣も“兌換紙幣”と呼ばれ、特別のものであった。

当時は、中国政府も外貨を集めに躍起になっていたのだろうが、最近では、外貨準備高で日本を上回り世界一になったそう。

――正に離世の感がある。

水族館の入り口に入ると大きな水槽があり、種々雑多な魚が泳いでいる。

松田がその前に立って、

「おっ、この魚、塩焼きにしたら美味しそう」

と言うと、汜莉は、

「まーあ、ウフフフッ…。日本の方は魚を見ると、必ずそう言いますね」

実際その魚は、エボダイを大きくしたような姿で、松田にはとても美味しそうに見えた。

「美味しそうに見えない？」

「ええ、まあ……」

「じゃあ、蛇を見るとどう？」

「蛇ですか、大好きですよ。上海の女性は大概好きだと思います、特に皮の部分が……」

「ほらね、そうでしょう。同じだよ」

と言って松田は、水槽の上から手を伸ばして魚の背を撫ぜた。

「あっ、私もやってみようっと……」

汜莉はいたずらっぽく笑い、水槽に手を入れた。

松田はハンカチを取り出し、濡れた手を拭いてから汜莉に差し出すと、ありがとうと微笑んで手を拭いた。

中国人は一般的にあまりハンカチを持つ習慣がない。かなり偉い方でも、トイレの後、手を振りながら出てくる姿を目にする。

汜莉はとても楽しそうに、水族館を歩き廻ってはしゃいだ。

その態度は、まるで自分の恵まれない境遇を、必死に振り払おうとしているようで、とてもいじらしく感じられた。

それで松田も、一緒になってはしゃいだ。

珍しい魚を見つけると汜莉は、

「こっち、こっち。早く、早く」

と、松田の手を引いて急がせる。小さな柔らかい手だった。

不謹慎にも、下腹部がムクリ、ムクリと頭をもたげて来たので、松田は必死になって、それを制した。

3

水族館を出ると、時刻はすでに五時を廻っていた。

「さて、どうしようかな……。少し早いけど、どこかで食事をしようか？」

「まだ、私、……あまり、お腹が空いていません」

俯き加減に汜莉が答えた。

「そう言えばそうだね。昼食が遅かったからね。じゃあ、少し散歩をしようか？」

「そうですね。黄浦江へ行きましょう」

「えっ、タクシーで？」

「ウフフッ…、ここからなら、すぐですよ」

「あっ、そうか。あの地球儀の裏側だったね」

「そうです。こちら側から見る浦西の景色も素晴らしいですよ」

「うんうん。前に来たことがある。外灘が一望できるんだ」

外灘は英語名で“BUND”、中山東一路から中山東二路までの黄浦江の西岸沿いエリアを指す。

この一帯は租界地区であったことから、“外国人の河岸”が外灘の由来である。

今でも租界時代の西洋建築が建ち並び、まるでヨーロッパのような雰囲気を醸し出している。

二人は黄浦江に向かって並んで歩き出した。

時々剥き出しの腕が触れる。その幾度目かのタイミングで、汜莉が松田の腕に手を差し入れてきた。

それは極自然な動作だった。

黄浦江の川面を舐めた風は、真夏の太陽に晒されて火照った身体に心地よい。

「ウワァー……、気持ちがいいわぁ」

「ふーう、ほんとうだね。風があるから蚊もいないし、夕涼みには最高だ」

「あっ、そうか。それで蚊がいないんだ」

と言って、汜莉はペロツと舌を出した。

「ここはいつ来ても、すごい人出だね」

「そうです。観光客はだいたい来ますものね。あっ、あの人たちは西安の人たちだ」

汜莉はその一団を、懐かしそうに見詰めている。

「ああ、懐かしい言葉……」

汜莉には故郷の匂いがしたのだろう、一瞬、顔つきが緩んで見えた。そして、

「お父さんとお母さん、それに妹たちはどうしているかなあ……？」と、寂しく言った。

「故郷へは、帰っていないの？」

松田の問いに、

「もう五年になるかしら……」
と空を見上げた。

「春節には……」
と言いかけて、
・・そうか、交通費もバカにならないんだ・・
と考え、松田は言葉を切って、遠くを見詰める汜莉の横顔をジッ
に見入った。

4

「七時ごろになって照明が点くと、またガラツと景色が変わるんだ
よね」

松田は着任当時、外灘の夜景に魅入られ、終業後によく訪れたもの
のだ。

「へーえ、そうなんですか。お独りで？」

と、悪戯っぽい表情を浮かべて訊いた。

「えっ、も、もちろんだよ」

「あっ、松田さんが紅くなった、紅くなった。ウフフツツ……」
もう一度悪戯っぽく笑った。

「えっ」

松田は頬を撫ぜながら優しい笑みを返していた。と、

「恋人はいないんですか？」

いきなり突っ込みを入れた。

「あ、えっ……」

「あっ、いるんだ。いないわけではないわよね。松田さんて、とって
も素敵なもの……」

「オジサンをカラカウものではありません」

松田は照れ隠しに、汜莉の笑窪を人差し指でチョンと突いた。

「私……じゃ、ダメですか……？」

「えっ？」

聞き取れたが、松田は聞こえない振りを装っていた。すると、
「私じゃ、ダメですか？」

と、今度ははっきりと言ってほんのりと頬を染めた。

「……オジサンをからかっちゃダメですよ」

わざとおどけて言ったが、汨莉の真剣な表情を見て、松田は沈黙した。

一旦汨莉の腕に力がこもり、それを解いて、今度は松田の手に指を絡めてきた。その小さな柔らかい手を、松田はしっかりと握り返していた。

息詰まるようなときが流れ、その緊張感から手が汗ばんでいる。それに気づいた松田が、

「あっ、ごめん」

と言って、手を解いて、ハンカチを取り出して汗を拭き取った。

「あっ、君も……」

汨莉は、受け取ったハンカチをキュッと握り締め、

「松田さんの、家へ行っても……いいですか？」

遠慮がちに囁いた。

四、悲しき企み

1

「えっ、ぼくの、家に……」

と慌てたが、なにをしに、と訊くほど野暮天ではなかった。

松田は自分の部屋に思いを巡らし、トイレ、オツケー、応接間、オツケー、寝室、オツケーと頭の中でチェックをしていた。

「よしッ！」

「えっ、なにがよし、ですか？」

「よし、夕食にカレーを作ろう」

松田は話を逸らした。

「カレーですか」

「そう、カレーは好きかい？」

「はい、前に一度、茂名路のお店で……」

日本人のお客様に連れられて、とは言わなかった。

「茂名路にあった店ね。あそこのカレーは、美味しくて当然だよ。日本の有名なカレー粉メーカーの経営だったからね」

「でも、とても高かったのを覚えていますわ。確か、四十元ぐらいじゃなかったですか。私たちの収入では滅多に行けませんよ」

「もうなくなったね。なんでも、ベラボウな家賃の値上げを要求されて、他へ引っ越したって聞いたけど……」

「あそこの家賃は高いと思います。なにしろ、“錦江飯店（老舗ホテル）”の敷地内ですから……」

「最近、家賃がドンドンあがっているそうだね。知り合いの総経理がこぼしていたよ。契約更改のとき、二倍の賃料を要求されたって言ってるね」

「上海は滅茶苦茶です。家の値段もドンドンあがっているし、庶民にはとても買えません。みんな投資目的なんです」

「汜さんはいろいろ知っているね」

「ええ、お店へ来るお客様が情報源です」

つい数年前まで上海市内のマンションでも、一平米当たり一万元ほどが相場だったのに、今や四万元、五万元が普通になっている。

基本的に中国のマンション価格は内装なしが一般的で、購入後に自分の費用で内装工事をするのだ。

価格は暴騰しているが、新しい物件ができると、すぐに売り切れてしまうそうだ。

香港や台湾などの外国資本、或いは中国の一部のお金持ちが、投機目的に買い占めてしまうのだ。

今は頭金として、総額の二十パーセントを用意しないと買えなくなったが、以前は全額ローンでも買えた。

松田も、上海へ来た当時に思い切って、マンションを買っておけばよかったと後悔しているが、バブル崩壊を目の当たりにした日本

人としては、なかなか買う勇気が出なかった。

況してや中国の場合、土地は国のもので、買えるのは使用权だけなのだから尚更だ。それに、六十年とかの期限付きでは、なにやら不安を感じてしまう。

「それじゃあ、“九海百盛広場”^{デパート}の地下スーパーへ材料を買いに行こう」

二人はタクシーを拾って、陸家嘴路から延安路隊道^{トンネル}を通り抜け、百盛デパートのある淮海中路へと向かった。

2

二十分ほどで、淮海中路と陝西南路の交差点の一角で“復興大厦”^{ビル}に寄り添うように建つ百盛広場に到着した。

復興大厦の一階には“麦当劳”^{マクドナルド}の大型店舗が入居しており、いつも若者たちで賑わっている。

この辺りは淮海路随一の繁華街である。

水族館からのタクシー料金は二十五元だった。

百盛広場の地下一階は高級スーパーになっていて、地下鉄一号線の陝西南路駅と繋がっている。

スーパーの入口でガードマンが、汜莉の小さなバックをセイフティーボックスに預けろと言ったが、それよりも大きなバックを持った松田にはなにも言わなかった。中国人も外人には弱い。

汜莉は、こんなに小さいのにと不満気な表情をしながらも、素直に指示にしたがった。

これは万引きを防止するための措置で、どこのスーパーでも同じことをする。

それにしてもガードマンの態度が悪い、従業員にしても同様で、客を客として見ていない。売ってやっている、嫌なら帰れといった態度だ。

配給制度が最近まで続いていたわけで、サービスなど必要もなか

った故に、当時の悪弊が今もいたるところに残っている。

サービスを受けたことのない人たちに、サービスの必要性や重要性を説いても、なかなか理解ができないのだろう。

百盛デパートは上海でも高級店の部類に入るが、今でも釣銭を投げて寄こすのが普通で、愛想笑いの一つもない。

「松田さん、とっても楽しそうですね」

「うん、新鮮な食材を見ていると、ワクワクしてくるんだ」

小一時間ほどかけて食材を買い揃え、二人は松田のマンションへと向かった。

マンションのゲートで、顔見知りのガードマンがニヤリと微笑んだ。だが氾莉は、平然としている。

— こういった場合、変に照れない方がいいようだ。

3

松田は部屋に入ると、早速カレー作りに取り掛かった。

はじめに、日本から持って来た魚沼産のコシヒカリを丁寧に磨いで、炊飯器に移し、水の分量を調整した。

「随分何回も洗うんですね。中国人は一回、シャカシャカと洗うだけですよ」

・・なるほど、それで中国のご飯は糠臭いのか・・
と納得した。

「うん、こうした方が美味しい。糠の臭いも消えるしね。この後、三十分は水に浸して置かないと、炊き上がりが強くなるんだ」

「怖い、ですか？」

「アツハハハ……、固い、ってことだよ。まあ、後で食べてもらえばわかると思うよ」

「水の量を増やせばいいじゃないですか」

「まあ、急ぎのときはね」

「私もなにか手伝いましょうか？」

「いいよ、向こうでテレビでも視ていて」

松田は料理の途中で人の手を借りるのが嫌いで、はじめたらすべて自分で遣りたかった。

「なにか手伝いますよお」

と汜莉が食い下がるので、

「じゃあ、ジャガイモと人参の皮を剥いてくれる」

とは言ったが、ジャガイモの皮を剥く手元が心元ない。

「あ、ああ、あゝあ、とても見ていられない。それでよく手を切らないね」

「私、運動神経がいいから」

「それは、あまり関係ないと思うけど。……ねえ、頼むからテレビを視ていてくれないか」

「邪魔ですか？」

「そう、はつきり言って邪魔。ぷッ！　ハハッ……」

「まあゝあ、ウフフッ……」

と笑って汜莉は、頬っぺたをプーと膨らませた。

「じゃあ、玉ネギの皮を剥いて、細かく切ってちょうだい」

「はあゝい。……、うつ、うつ、うつ……涙が出る。目が痛あゝい。やっぱり、テレビを視てまゝす」

「アッハハハハッ……。そこに、ビデオがあるでしょう」

「はい」

松田が手早く準備を整えて応接間に行くと、汜莉はなにやら真剣な眼差しでテレビ画面に見入っている。

「なにを真剣に視ているの？」

「えッ！　あれっ、もう準備できたんですか？」

「ああ、カレーは簡単だから。後はときどき灰汁取りをして、出来あがりを待つだけさ」

「アク、ってなんですか？」

「ちょっと台所に来てごらん」

「ダメです、今これを視ているところから……」

「どれどれ、……百歳万歳か。これはおもしろい」

この部屋で視られる日本語放送はNHKだけだったが、それでも駐在者にはとても助かる。

「はい、ここに座ってください」

と汨莉が脇に寄った。

松田がソファに座ると、二人のお尻がピタリと密着する。剥き出しの腕も触れ合ったが、汨莉は身体をずらさなかった。

徐々に体温を感じてきて、松田の下腹部がモゾモゾしはじめる。

・あぁ、拙いな・

松田は耐え切れなくなつて、ちよつと鍋を見て来ると席を立ち、少し硬くなりかけたものを台所でなだめることにした。

4

……と、

「どうですか、できましたか？」

いきなり汨莉に後ろから声をかけられ、

「えッ！ うっ、ま、まだできないよ」

と驚いた松田は、顔だけを後ろに捻つて答えた。

どれどれ、と汨莉は鍋の中を覗き込み、

「アクって、これのことですか？」

と鍋の中を指さした。

松田は下腹部をできるだけ鍋に近づけ、膨らみを悟られないようにしながら、うんと答えて、おタマで灰汁を掬って見せた。

「これを綺麗に取らないと、美味しくできないんだ」

「へーえ、松田さんはなんでもよく知っているんですね。私に料理を教えてください」

「いいよ、いつでも教えてあげるよ。じゃあ、この灰汁を取ってごらん」

「はい。……あつ、松田さん、どこへ行くんですか？」

「う、うん、ト、トイレ……」

と言って、松田は下腹部を見られないようにサッと台所を出た。

「私もお……」

「す、すぐ戻るから、灰汁を取っていて」

・ふーう……、やばい、やばい。気がつかなかったろうな？・
少し硬くなっているの、なかなか小便が出てこない。

「終わりました？」

「えッ！ な、ななな……」

汨莉はいきなりトイレのドアを開けて入り込み、前に廻って松田の下腹部を覗き込もうとする。

「あっ、な、なに、をするの！」

松田は見られないようにと、身体を捻りながら声を荒げていた。

・なんだ、この娘は・

それでも覗こうと顔を身体の前に廻してくるので、松田は慌てて遮った。

「オッきい！」

「ばっ、ばか……オシッコかけちゃうぞ」

と言って、下腹部を汨莉の方に突き出した。すると、キャーッと叫び声をあげて、トイレから出て行った。

・まったく、大人なんだか、子供なんだか……

汨莉の行動が、松田には理解できない。

小便を済ませ、台所に戻ろうとすると、汨莉は応接間でソファに寝そべってテレビを視ている。

松田はガスを消してからそっと汨莉に近づき、唇にチュッとキスをした。

怒り出すかと思ったが、案に相違して応じた。下腹部が突っ張ってくる。

しばらくの間キスを繰り返していたが、突然クルッと背を向けると、やがて汨莉は静かな寝息を立て始めた。

・・あらあ・

松田の邪な期待は、見事な空振りに終わった。

第三章 漆黒の闇

一、光と影

1

二〇〇五年九月……。

中国は二十年以上、対前年比で毎年十パーセント超の経済成長が続いている。

上海に至っては、ここ三年、毎年二十パーセント以上の成長率だそうで、その繁栄を謳歌している者が沢山いる。

一般庶民も車だ、海外旅行だ、マンションだと、その物欲は止まるところを知らない。しかし、そういった人たちも、十三億人とも十四億人ともいわれる人口から見れば、ほんの一握りにすぎない。

そういった恵まれた人々を光とするなら、当然、光の当たらない社会の底辺で蠢く人々、影の部分が存在する。

協同通信社の記者で上海に駐在していた織田実^{おだまこと}は、そんな影の部分にいつしか興味を抱いた。

織田がその男の存在を知り追いかけて始めて一年が経過、ひょんなことから接触の機会を捕らえた。

その男の存在を織田に教えた政府高官は、

『その男と会うのは、国家主席に会うよりも難しいことだ』
と言って笑った。

正に伝説化された人物である。

話は半年ほど遡る。

きっかけとなったのは、織田が会社に通う道すがら、いつも決まった場所で物乞いをする男との出会いだった。

織田は住んでいる徐家匯のマンションから、地下鉄陝西南路駅にある会社まで、運動不足を補う目的で一時間ほどかけ歩いて通っていた。

交通量の多い淮海中路を避けるために、いろいろなルートを試してみたが、ちょっとおしゃれで静かな衡山路を抜け、汾陽路に出て復興中路、南昌路、陝西南路と辿るのがベストと気がついた。

織田はポケットの中の小銭を、同情心からではなく、ただカチャカチャと煩わしいとの理由で、その男の皿に投げ込んだ。

それがいつの間にか習慣になり、わざわざ一元コインを用意するようになっていた。

或る日、いつものように金属製の器にチャリーンとコインを投げ入れると、

「イツモ、アリガト……」

と、小さなくぐもった日本語の囁きが聞こえた。

「あれッ!? 日本語ができるの?」

織田が思わず聞き返えすと、乞食はニヤリと笑った。

頭頂部から顔半分にかけて、ケロイド化した顔を歪めて笑うその表情は、なんとも不気味なものであった。

2

次の日から織田は男に、

「早上好!」
おはよう

と挨拶をするようになった。

男は軽く会釈を返すだけだったが、織田はなんとなく意思疎通の糸口が、見えてきたような気がした。

そんな日々が一月ほど続いた或る日、男が、

「あんた、休みはないのかい?」

と、織田に問いかけてきた。

「えッ!? ……ああ、家にいても遣ることがないしね。ハハッ……」

「そうか、俺たちと同じだ。まったく日本人ってやつは仕事が好きだな。クククク……」

と、不気味な笑顔を向けた。

「いつも、アリガトよ。……俺は、明日から他へ移る」

「どこへ？」

と、織田が問うと、

「遠いところだ。来年になれば、また戻って来るから、そのときはよろしくな」

と答えて、へへへッ……と低く笑った。そして、

「あんた、少しは中国語がわかるようだな」

「ああ、だいたいわかるよ」

と織田が答えると、

「そりあ、いいや。……おもしれえ話、聞かしてやろうか？」

「面白い話？」

興味を示す織田に、

「ああ、そうだよ。こんなことを知っているのは、俺たちの世界の人間か、政府のお偉方のほんの一握りくれえのもんだ」

と言って、

「どうだ、聞きてえか？」

と声を潜めて囁いた。

織田が、頷き屈み込むと、男は話しはじめた。

「俺たちの頂点にはな、帝王とも裏の国家主席とも呼ばれる男がいるんだ。クククッ……この話、信用するかい？」

辺りを窺いながら、誇らしげに言う。

「帝王？　裏の国家主席？　……やった、とうとうチャンスが巡ってきた……」

と微笑む織田の反応を、男は誤解したようで、

「嘘じゃねえ。信じねえなら、この話は終わりだ。もう行けッ！」
と臍を曲げたようだ。

織田は慌てて、もちろん信じると身を乗り出したが、

「今日はもう止めだ、止めだ。もう行けよ」

と、つれない返事が返ってきた。

物乞いの前に屈み込んでいる織田に、行き交う人たちは不信気な

視線を投げかけ、避けるようにして通り過ぎて行く。

諦めて立ち上がるとうとする織田に、

「明日なら、少し時間がある。襄陽公園、知っているだろう？
うだ、来るか？」

男は再び囁きかけたので、

「もちろんです。もちろん行きます」

と織田は応え、

「朝の七時だ、遅れるなよ」

と言う男の言葉に頷いた。

織田がそのまま立ち去ろうとすると、

「先生、いつもの、銭、忘れてるよ」
だんな

と言って、男はクククツ…と笑った。

・・よっしゃッ！ 長い間追いかけていたものが、先方から近づいて来てくれた。なんとしても、この機会を逃さないぞ・・

織田は、思わず右拳を握り締めていた。

3

翌朝、織田は逸る気持ちを抑えながら、いつもの順路を通って、約束した時間より少し早目に襄陽公園に到着した。

日曜日の公園には早朝から老人たちが溢れている。

男の到着を待つ織田の足元に、タバコの吸殻が五本、六本と増えていった。

三十分ほど経過すると、流石に織田にも不安が芽生えたが、それでも待ち続けるしか方法はなかった。

一時間ほどが経過した。……と、

向かい側のベンチで新聞を読み耽っていた男が、すくっと立ちあがり織田の方へ近づいて来る。

織田は、おやつと思い目を凝らすと、洒落た帽子を目深に被り、大きめのサングラスをかけ、さっぱりとした服装ながら、紛れもな

くいつもの男だった。

一時間以上もその男を目の前にしながら、まったく気がつかかったことになる。

どうやら織田の様子を窺っていたらしい。用心深い男だ。

「待たせたな」

と言って、男はニヤリと笑った。

「あまり時間がないから、手短に話すぜ」

いつもと違い、ダンディーささえ感じる話し振りである。

織田の隣に座った男は静かな口調で、

「昨日の続きだが……」

と前置きをして、訥々と語り始めた。

「俺も会ったことはねえ。でもな、俺のボスのボスが、去年初めて会ったと言っていた」

「ボスのボス、ですか？」

「そうよ。こう見えても、俺たちの組織も複雑でなあ……」

その男は仲間からは、妖ヤオと呼ばれているが、本名はわからない。

年齢も定かではないが、仲間の話から推測すると三十四、五歳ではないかと言った。

「俺のボスもまだ会ったことはねえ、と言っていた。俺ら下ツ端じゃ、とても、とても……」

「そうですか」

少しガッカリしたが、思い切って頼んでみた。

「妖さんの組織について、少し教えていただけませんか？」

「ん？ ……いいだろう」

思いの外簡単に、妖は受諾した。

二、乞食の世界

妖が語ったところによると、乞食の世界は完全な縦割り社会で、実力（稼ぎ多い）と年数（組織に対する貢献度）を経ないと、幹部にはなれないのだそうだ。

一般社会に喩えれば、妖はようやく課長になったところらしい。妖のボスが部長で、ボスのボスが支社長と言えばわかり易い。

織田はいつも疑問に思っていることを口にしてみた。

疑問というのは、街中で不自由な身体を引きずりながら、物乞いをする子供たちの存在である。

子供たちはどの子も同じ障害を抱えていた。そのことに、あまりにも不自然さを感じていたからである。

「道端で物乞いをしている子供たちが沢山いますよね。しかし、ど
の子を見ても同じ障害を持っていますけど、先天的な病気……、と
いうわけではではないですね？」

妖は織田をジロリと睨み、

「そうよ。……あんたの想像どおり、作られたものだ」
と応えたので、

「やはりそうか、可哀想に……」
と織田が呟くと、

「なに、可哀想だとおーッ！」

妖は急に声を荒げた。そして、

「いいか、あんた……あいつらはな、親にも見捨てられた連中だ。
戸籍がねえんだよ、戸籍がよ。そうゆう人間に、どうやって生きて
いけてゆーんだ。ええ……なんか方法があったら、俺にも教えて
くれよ」

と訴えるように、悲痛な声を絞り出した。

中国では大都市の戸籍を持っていないと、学歴があっても碌な仕事
にありつけない仕組みになっている。

況してや戸籍がないとなると、仕事はおろか初等教育も受けられず、
ただ生きることさえ難しい。

また、田舎では避妊に対する無知と、労働力として子を産む場合もあり、罰金を逃れるために届け出を怠る。そんな人間が全国には数百万人、いや数千万人いるとよそう予測されている。

― 貧しさと一人っ子政策の弊害、と言えるだろう。

更に、動物を育てるよりも子供を生んだ方が、餌代はかからないし、直ぐにお金に換わると嘯く輩もいるらしい。

妖は込みあげてくる怒りを静めるかのように、声を押し殺して話し続けた。

「あんたに怒ってもしょうがねえが、簡単に、“可哀想だ”なんて言葉を吐くなよ」

妖自身も同じ境遇なのだろうと想像し、織田は口を噤んだ。

「……他になれば、もう行くぜ」

と立ち上がろうとする妖に、織田は躊躇いながらも、

「あ、待ってください。あなたのボスに……、ボスって方に会わせてください？」

と、思い切って頼んでみた。

「ボスに？」

織田の申し出に、妖は怪訝な顔を向けた。

「もっともっと、あなたの方の世界のことを知りたいのです」

織田は熱心に頼んだ。

「俺たちのことを……。それを知って、どうするンだ？」

「はい、本に書くつもりです」

「あんたは作家か？」

「いえ、作家ではありませんが……。なんとゆうか、こう、繁栄の中に潜む現実、というものを、世の中の人々に知ってもらいたいと思います」

織田は熱く語り、熱心に妖に頼んだ。

しばらく考え込んでいた妖が、

「ふーむ……。まあ、ダメだとは思うが、あんたには随分と世話ン

なった。頼んでやるよ。……ところで、電話は持っているかい？」

「はい、あります」

と、携帯電話を差し出す織田を遮り、

「そうじゃねえよ。番号を教えてくれ、後で連絡するから」

織田が慌てて名刺を渡すと、

「協同通信、新聞記者か……。じゃあな」

妖は後ろも振り返らず、早足にその場を去って行った。

・・クククッ…、新聞記者なら利用価値はあるな・

と呟きながら。

2

織田は一週間ほど、今か今かと電話を待ったが、妖からの連絡はなかった。

いつしかそんな約束も忘れ、織田は安穏な日々を過ごしていた。

一ヶ月ほどが経過した或る日、着信音に織田が携帯電話へ手を延ばすと、

「覚えているかい？ 俺だ、妖だよ」

特徴のあるくぐもった声が聞こえてきた。

「も、もちろんです。今どちらに？」

「ハア、ハハハッ…、どちらなんて気の利いたところじゃねえよ。それより、ボスが会ってもいいそうだ」

妖の言葉に狂喜した織田は、

「いつ？ どこで？」

と矢継ぎ早に質問を繰り返す織田を妖は遮り、

「まあ、待て待て……こっちから順番に話すから、黙って聞けよ」と落ち着き払った声で応じてから、

「俺がいつも座っていた場所があるだろう。そこに今は別の男が座っているはずだ。……そうだ、片腕のない男だ。その男に毎日百円、十日間続けて渡せ。いいな、毎日だぞ」

と一方的に言って電話を切った。

妖に言われた通りに、毎日百元札を渡し続けたが、十日経っても、男はなにも言わない。

堪り兼ねた織田は、

「あんた、妖さんの部下だろう。なにか、私に伝えることがあるだろうか？」

と切り出した。しかしその男は、

ありがとう
「謝謝、謝謝」

と応じるだけで、それ以上はなにを訊いても答えなかった。

・これは騙されたか・

と思いつつ業務をこなしていると、妖から電話がかかってきた。

「妖だ。あんた、本気だってことがわかったから、ボスが会うそう
だ」

妖は“人民公園”近くのホテルと時間を指定し、最後にこう付け加えた。

「話が終ったら、ボスに千元ほど渡してくれ。車代だ、と言ってな
あ」

そして、こうも付け加えた。

「ボスを怒らすなよ。次の日のお天道様を拝みたかったらな。ヘエ
ッ、ヘヘヘッ…」

3

二〇〇五年十月、約束の当日……。

指定されたホテルのフロントで、妖に言われた通り、龍ロオンという名を告げると、

「あちらでお待ちです」

と、丁寧な応対が返ってきた。

こういった三ツ星クラスの旧国営ホテルでは、極めて珍しいことである。

その喫茶室には数名の客がおり、織田は妖から聞いた服装の男を捜した。

三つ揃いの背広に帽子とサングラス、目的の男は直ぐにわかった。

「龍先生ですか？」

と問うと、その男はゆっくりと顔をあげて、ニヤリと微笑んだ。

「あつ、えッ！　よ、妖さん？」

「フフフッ…、久しぶりだな。俺だよ」

と言ってサングラスを外し、織田に顔を確認させると、直ぐにまたかけ直した。

「まあ、そう意外な顔をするなって……。俺たちにも色々あってなあ」

織田の不満顔を見て取ったのか、

「悪く思うなよ。あれで、あんたが本気だってわかったから、こうして出て来たんだ」

と言って妖は、パチンと指を弾いてボーイを呼んだ。

「酒でも飲むかい？　俺はもう遣っているけどよ」

ようやく落ち着きを取り戻した織田は、アメリカンコーヒーを頼んだ。

「クウククク…、よくそんなものを飲むな。ところで、うちのボスに会ってなにを頼みたいんだ？」

「え、ええ……」

織田は言い淀んだ。

「いいから、言ってみろよ。俺にできることなら、遣ってやるから」

「はい。…：妖さんが仰っていた、…：影の国家主席と呼ばれる方に会わせてください。お願いします」

と、深々と頭をさげた。すると妖は、

「なに、帝王に、アツハハハッ…、それはムリだ、ムリだ」

辺りの客が振り返るほどの笑い声を立てて拒絶した。

「な、なんとかお願いします」

と食い下がる織田に、

「この前も言っただろう。この俺でさえも、まだ会ったことがねえって……」

「はい、それは覚えています。でも、どうしてもお会いしたいのです。お願いします」

織田はもう一度頭をさげた。

「俺もよお、できればなんとかしてやりてえとは思うんだが……。やっぱりなあ、世の中には成らねえこともあるんだ。俺がもう少し上になれば、可能性はあると思うけどなあ。クククッ…、まあ、それまで待てや」

「そこをなんとか…。そうだ、妖さんの、妖さんのボスという方をお願いしてみただけませんか？」

「しつけれ、奴だな」

と呟いて、しばらく考え込んでいた妖が、

「よし、わかった。乗りかかった船だ、俺のボスに頼んでみてやろう。でもなあ、あんまり期待はするなよ」

「はい、ありがとうございます」

と笑みを湛えて礼をいう織田に、

「けっ、もう叶った気でいやがる。だから、素人はこええよ」

と言って、妖はニヤリと笑った。

「それじゃあ、もう行くぞ」

と言う妖に封筒を差し出すと、

「なんだ、これは？」

織田が約束の千、と言いかけると、

「へへッ…、糞真面目な奴だ。いらねえよ、そんなもん。どうせ安月給なんだろう」

と、封筒をポンと机の上に投げ出した。

「いいか、期待するなよ。また電話する。じゃあな……」

妖は悠然と出口に向かって歩いて行く。

どこから出てきたのか、いつの間にか、若い二人の男が妖に付き従っていた。

織田がレジに向かい、

「多少錢？（いくらですか？）」

と訊くと、

「いえいえ、とんでもありません。結構です、ただけませんか」
との答えが返ってきた。

三、暗闘

1

二〇〇五年十月……。

翌日の午後、妖から電話が入った。

『俺のボスがあんたに会ってみてえとよ』

「ほ、本当ですか？」

と訊き返す織田に、

『当たり前じゃねえか。俺が嘘をゆってどうするんだ。こう見えても、嘘と坊主の髪は結ったことがねえ』

「あっ、その喻え、日本のものですね」

『クククク……、そうかい』

相変わらずの物言いではあるが、その言葉の中に、織田は親しみを
感じ取っていた。

『夜でもいいんだろう？』

「もちろん構いません。何時でも伺います」

『そうか、明日だ。七時に昨日のホテルに来な』
と言って電話を切ろうとする妖に、

「あっ、つ、通訳をつけちゃいけませんか？」

と訊くと、

『そらあゝ、拙いわなあ。ダメだ、ダメだ』
と素気ない返事が返ってきた。

「それじゃ、録音はどうでしょう」

『録音かあ。……まあ、いいだろう。だが、内容はチェックさせてもらうよ』

そして妖は、織田の次の言葉を見越したように、

『でもよ、写真はダメだぞ、絶対に、なっ』

と機先を制せられた。

「ありがとうございます」

と礼を言う織田に、

『いいってことよ。じゃあ、遅れるなよ。ボスは気が短けえからな。クククッ…』

と意味深に笑って、妖は電話を切った。

翌日は一日中仕事が手につかなかった、なんと一日の長く感じたことか……。

六時の終業を待ちわびた織田は、終業ベルが鳴ると五分後には会社を飛び出していた。

指定のホテルへは、タクシーでなく地下鉄で向かった。

上海の週末は道路が混むので、約束の時間に遅れることを恐れたからである。

会社を早めに出たお陰で、六時半には地下鉄一号線の人民公園駅へ到着していた。

駅の階段をあがると、視界がパツと開ける。

妖から指定されたホテルは目の前だ。

ホテルは南京東路に面していて、西藏中路との交差点の先には、世界一長いという遊歩道が外灘ワイタンに向かって伸びている。

夜の南京東路は、小ささまざまな派手なネオンに彩られ、昼の姿とはガラリと一変する。その眩い光に吸い寄せられるように、観光客目当ての夜の蝶たちも集まってくる。

上海の客引きは若い女性が多く、誘い方は極めて直接的で駆け引きの妙もなにもない。

『女いらない?』

「えっ？」

『スケベしない？』

「否、いいよ。知らない」

『好い女いるよ』

「いいって、知らないよッ！」

と強く拒絶すると、

『ケチッ！ スケベヤローッ！』

といった調子で、別れ際に捨て台詞を投げかけられる。

2

まだ約束の時間には間があったので、織田は昨日の喫茶室で時間を潰すことにした。

空いている席に座ろうとする織田のところへ、ホテルのボーイが飛んで来て、

「妖さんが部屋でお待ちです。ご案内します」

と声をかけてきた。

この場所だと、端から思っていた織田は、部屋へ案内すると言われて驚いたが、ボーイの後ろに黙ってしたがった。

ボーイは十二階の一番奥まった部屋の前に立ち止まると、お待ち下さいと言ってからドアをノックした。

部屋の中から、誰だと問う、聞き覚えのある声が返ってきた。

「お客様をお連れいたしました」

「おう、来たか、来たか。早いな」

と妖が扉を開けて、織田を部屋に招き入れながらボーイにチップを渡した。

「ボスはまだまだ。そこらへ座って、少し待っていてくれ」

妖のボスがまだ来ていないことに、幾分ホッとしながらも、織田は緊張で手が汗ばむのを覚えた。

そこで落ち着くために、

「妖さん、タバコを吸ってもいいですか？」

と訊くと、

「なんだ、あんた、タバコを吸うのか。健康に悪いから止めた方がいいぞ」

と言つて、ニヤニヤ笑いながら、

「実は俺もだ。ガキの時に覚えた悪い癖が、止められなくてなあ。クククッ…」

と、織田にタバコを一本差し出した。

「今のうちに吸っておけ、嫌がる奴もいるからな。まあ、来られればだけどな……」

と意味深に言つて、再び、クククッ…と笑った。

「……………」

織田はタバコに火を点けて煙を深く吸い込むと、昂ぶる気持ちが少し落ち着いてくるのがわかった。

落ち着きを取り戻した織田は、部屋をぐるっと見廻した。

そこはかなり大きな部屋で、奥にもう一部屋あるらしく別のドアがついていた。

四方山話をしていると、間もなく部屋をノックする音がした。

妖の顔に緊張が走る。

しかし妖は立っていいこうとしない。

間を置いて、もう一度ノック音、それでも妖は立たない。

そして、もう一度ノック音、ようやく立ち上がり、織田に向かって、そのまま、そのままという風に両手で制しながら、無言でドアへ向かった。

・・なにか取り決めがあるのだろうか・・

ドアチェーンを外さず扉を少し開けて、妖は訪れた者と言葉を交わしている。

なにやら只ならぬものを感じたが、織田は座ったままで成り行きを見守った。

妖はドアを開けることなく織田の許へ戻り、

「あんた、悪いが、今日はダメになった。日を改めるから、今日はこのまま返ってくれ」

と静かに語るその言葉には、否応を言わせないだけの緊張感と迫力があつた。

「わかりました。それでは帰ります」

異様な雰囲気を感じ取り、妖の言葉に素直にしたがって帰ろうとする織田に、

「ちょっと待て、若い者に送らせるから」

と、命ずるように言い放った。

「いいえ、結構です」

と断る織田に、もう一度きつく言った。

「いいから、一緒に行けッ！」

その言葉には、もう拒絶は許さないという強い意思が込められていた。

妖の表情から、なにか只事ではない問題が起きたことは明らかだ。

しかし織田には、それを確かめる術はない。

織田を送ってくれたまだあどけなさの残る男は、なにを訊ねても一切答えず、ただニコニコと微笑むばかりであつた。

後でわかったことだが、その男は聾啞者だった。

四、漆黒の闇

1

二〇〇五年十一月……。

その後妖からの連絡はなく、一ヶ月が無為に過ぎて行った。

・ ・ いったい、あのときになにが起こったのか？ ・ ・

もちろん織田は、新聞にも毎日注意を払ったが、関連するような事件の記事が載ることはなかった。

そんな織田の心配を見越したように、或る日、突然妖から電話がか

かってきた。

『よお、俺だ』

「あつ、妖さん」

『あんときは悪かったな。ちょっと、のっぴきならねえことが起こっちまって』

「なにが起こったのですか？」

と問う織田に妖は、

『あんたらには関係のねえことだ。まあ、あまり関わらねえ方がいいこともあるもんだ』

と突き放すように答えた後、

『で、どうだ……まだ、うちのボスと会う気はあるか？』
と訊いてきた。

「それはもちろんです。ぜひ、お願いします」

と、電話口に向かって頭をさげる自分の姿に、思わず織田は苦笑を漏らしていた。

『そうか、それじゃあ、明日だ。明日の日曜日、昼間でいいから、この間と同じホテルに来い』

「ありがとうございます。で、何時に伺えば？」

『そうさなあ……、十二時少し前に来いよ。一緒に飯でも喰おうじやねえか。フロントで俺の名前を言えば、わかるようにしておく』

「えっ、龍さんですか、それとも妖さん？」

『龍……。いいんだ、妖で』

織田はそのとき、なにか引っかかるものを感じたが、妖の機嫌を損ねてはと、それ以上の追求をしなかった。

約束の時間にボーイの案内で以前と同じ部屋へ行くと、

「おお、よく来た、よく来た。まあ、入れ」

妖は機嫌よく織田を部屋に招き入れ、

「ほら、タバコ。気兼ねなく、やってくれ」

と、“中華”という銘柄のタバコを一箱、織田に投げ寄こした。

「これは役人からの貰いものだが、けっこう良いタバコだな。気に

いったら、好きなだけ持っていけ」

妖はやけに機嫌がいい。

ソファにどっかりと腰を落とした姿には、以前とは違う貫禄さえ漂っている。

・たった一月あまりで、これほど人が変わるものか……。なにが妖を変えたのか？・

織田は不思議に思ったが、間もなくその理由が理解できた。

「龍さんは何時ごろいらっしゃるのですか？」

と織田が訊ねると、

「龍……、奴は来ねえ。いや、来られねえ、と言った方が正解かな」と言っ
て、クククク……と笑った。

「来られない？ 来られないって、どうゆうことですか？」

2

「奴は、死んだ」

とぶっきら棒に言い放った。

「死んだ……。いつ？」

「あんたが、この前ここに来たときだ」

織田が理由を訊くと、

「もういいだろう。あんたには関係のねえことだよ」と醒めた表情でいい、

「まあ、お陰で、今度は俺がボスに納まった」

と緊張した面持ちで呟いた。

織田はあのときのことを思い出し、或る推理をした。そこで確かめるために、妖に鎌をかけてみる。

「そうですか、それは辛いことですね」

「クククッ……、辛い、か。……なにが辛いものか」

妖は呻くように声を絞り出した。

「俺をこんな化け物にしたのは、あいつだ。……まだガキだったか

ら、俺は覚えてねえが……地虫がそう言った」

「地虫？」

「俺の親代わりみてえな男だ……」

乞食の世界では、幼い子供をかどわかしたり買ったりして、働き蟻と呼ばれる下部組織を作ると聞いたことがある。

また、ただの子供では稼ぎが少ない上に、逃げられる恐れもあるの
で、無理やりカタワにすると、以前妖から聞いていた。

「前にちよつと話しただろう、……公園だよ。あの男は残酷な奴で
な、あんたも見かけるだろう街中で、足がこう、ひん曲がった子供
たちをよ。俺のようにケロイドの奴、腕のねえ奴、足のねえ奴、い
っぺえいるだろうが、カタワモンがよお。この前、あんたを送った
男、覚えているかい？ 奴は舌を切られている」

・・なるほど、それで一言も喋らなかったわけだ・・

織田はそれで合点がいった。

妖から具体的な事実を聞かされて、織田は恐ろしさに身震いを禁じ
得なかった。

「あいつは、……それを楽しんでいやがるのよ。激痛でギャーギャ
ーと泣き叫ぶガキどもの悲鳴を、まるで音楽でも聴くようにな。け
ッ！」

息を吞んで聞き入る織田に構わず、妖は話しを続ける。

「あいつがテメエでやることもあった。まだ物心もつかない赤ん坊
に、熱湯を被せたり、腕を叩き切ったり、足をへし折ったり……、
残酷なことを平気でやる奴よ」

妖は自分の話に耐え兼ねたように言葉を切り、怒りに震える手でゆ
っくりとタバコに火を点け、大きく煙を吸い込んだ。

「……死んでしまう児も、いるでしょうね？」

織田が躊躇いがちに訊くと、

「ああ、いるよ……。下水にポイで終わりだ」

妖はタバコの煙を吐きながら、寂しげに答えた。

「殺人じゃないですか」

驚く織田に妖は、
「ハッ、ハア、ハハハッ…、俺たちにはな、…戸籍がねえと前に言っただろう。その意味がわかるか？　それがどうゆうことか、わかるか？」

3

「教育が受けられないとか、就職ができないとか……」

織田のトンチンカンな答えに妖は、

「存在しねえんだよ、俺たちはッ！　元々存在しねえんだ……」
と強く言い放ち、語尾が寂しげに掠れた。

織田は自分の浅はかな考えが恥ずかしかった。
戸籍がないということが、生きる上でどれだけ大変なことか、それまでは考えたこともなかった。

「死のうが生きようが、誰も知ったことじゃねえ、ってことさ。ククク……」

と妖は、自嘲気味に笑った。

そのときドアがノックされ、

「食事をお持ちしました」

と言うボーイの声が、部屋の重苦しい雰囲気や和らげてくれた。

オウ、と返事を返して立ち上がる妖、織田には心なしか目が潤んで見えた。

「まあ、こんなものだが……。食事はまだだろう？　喰ってくれ」
出された食事はスパゲティーにサンドイッチ、それに鶏の唐揚げ、野菜サラダといったもので、食欲をそそる好い匂いを発していた。
朝食を取らずに出てきたので、腹は空いているはずだが、妖の話を聞いた所為か、織田には少しも食欲が湧いてこない。

一方の妖は、織田に勧めた後、貪るように喰らいついていた。

織田の食があまり進まないのを見て取った妖は、

「なんだ、食欲がねえようだな。人間、喰えるときに喰っとけよ。」

あんたらしいつでも喰えると思っているから、食欲がねえのなんのと贅沢なことを言ってられるけどなあ。本当の飢餓を経験したら、そんな悠長なことは言ってられなくなるぞ。クククク……」

サンドイッチを口に運んでみたが、織田には砂を咬むような虚しい味がした。

「ククククッ…、それでいいんだ。喰えるときは吐きながらも喰え。俺たちはな、ガキンとき、稼ぎが悪けりゃ、何日でも飯抜きよ。そんなときゃ、ゴミ箱の残飯を争って漁ったもんだ。例え稼ぎがあっても、腹一杯は喰わせちゃもらえね。栄養の行き届いた乞食じゃ、様になんねえだろう。クククク……」

寂しい笑いだった。

妖は織田のカップにコーヒーを注ぎ、サンドイッチを頬張りながら話を続けた。

「生かさず殺さず、ガキンどもは正に働き蟻よ。でもよ……そこから這い上がった者だけに、天国が待っているわけだ。クククク……」
食事を終えた妖の皿を見ると、スパゲティもサンドイッチも半分以上残っている。

「これか、不思議に思うだろう。ガキンときに腹一杯喰ったことがねえから、胃袋が小せえんだ。これ以上は喰えねえ。金ができてもな、情けねえ話だろう。ククククッ…」

と悲しげに呟く妖に、織田が食事の礼をいうと、

「おーい、オメェら。これを片付けろッ！」

と、妖が奥の部屋に向かって怒鳴った。

すると、若い男が二人飛び出して来て、テーブルの上の残り物をサッと片付けた。

一人は妖に命じられて織田を送ってくれた男だった。

「あいつは猴だ、知っているな。この間あんたを送った男だ。……あいつも龍に遣られた口でな、舌がねえのよ」

織田にさっきの残酷な話が甦ってきた。

「便利な男でなあ、俺も重宝している。無駄口は叩かねえしよお。」

クククク……」

一度会っただけだが、その猴と呼ばれる男の笑顔の下に隠された冷酷さを、織田は感じ取っていた。

「おお、そうだ。あんた、ボスと会いてエンだったな」

と言って妖は、親指を立てて見せた。

「ええ、それもあります、……もう少し組織のことを、聞かせてもらえませんか？」

「……、いいよ」

妖は簡単に同意した。

五、新しいボス

1

やはりボスになったことで、気を良くしているのであろうか、妖は饒舌に語り出した。

「まあ、簡単に言っちゃえば、あんたらの公司（会社）と同じよ。もつともこっちは完全な縦割りの社会でな、それは厳しいもンだぜ。日本の公司も中々厳しいとは、聞いちゃいるが、なんて言ったかなあ……。そうだ、そうだ過労死だ。クククク……」

「そうです、よくご存知ですね。ところで、妖さんは会社の役職なら、どのクラスということになるのですか？」

「そうよなあ……。あんたらの組織はよくわかんねえが、まあ、俺のボスが支社の総経理（社長）で、俺はその下、副総経理（副社長）クラスってとこか……」

「なるほど、で、妖さんの下には、どのくらいの部下がいるのですか？」

「部下か、カカカツ…、部下はいいやな」

「俺の直に三人、そいつらにそれぞれ五人、その下に十人ずつ、そ

の下の働き蟻が……」

指折り数えながら妖はこともなげに答える。

「五、六百といったところか」

「で、では、全体では？」

精々数十人と考えていた織田は驚きの声を発した。

「全部でか。そうよなあ、うちの組織には俺と同格の奴がもう一人いるから、千人つてとこだ。下の方は増えたり減ったりしているから、よくは知らねえが……」

「物凄い人数ですね」

と驚く織田に、妖は追い討ちをかけるように、

「でもよお、俺は他に無錫と南京、蘇州なんかも仕切っているんだぜ。まあ、それぞれ頭はいるけど、俺たちの組織の傘下に属している」

「いったい妖さんのボスは、何人の上に立っているのだろうか？」

驚き、呆れる織田に、

「一万がとこだ」

・日本のヤクザの上納金システムと、同じような仕組みになっているとのことだが、妖の下には、毎年いくらぐらいの金が集まるのだろうか？・

織田は思い切って、それを訊いてみた。

「ククククッ…、それは言えねえ。まあ、あんたらには想像できない額だ、とだけ言っておこうか」

と、予想通りの答えが返ってきた。

「では、働き蟻といわれる子供たちは、どのくらい稼ぐのですか？」

織田は質問を変えてみた。

「そうよなあ…。まあ、あいつらは、てえしたことはねえが、幹部クラスになると年に三、四十万元稼ぐ奴はザラにいるよ」

「ということは……、五、六百万円ですか、す、凄い」

上海の大卒初任給が月に二、三千元、それと比較すると、その金額がどんなに凄いかわ理解できようというものだ。

「ヘッヘヘ……、あんた頭がいいな。俺の稼ぎを計算しているだろう」

織田は驚きの世界を垣間見た気がした。

「まだまだよ。全国にはな、俺たちと肩を並べる組織が四つある。小さいのを入れると一万やそこらじゃきかねえな。だいたい、俺らも入れた五つの組織で、全国を牛耳っているわけだ。まあ、個人営業の奴らも居るには居るがな……」

「個人営業？」

「ああ、組織に入らねえで、流しで稼ぐのがいるのよ。時々、上海に流れて来るのもいてな。きっちり挨拶を通せば、四分六分で営業を遣らせてやる。もちろん、六は俺たちが取る。しかし中にはもぐりで稼ぐ、ふてえ奴もいる」

「そんなときは……？」

と、思わず問いを發して、織田は後悔した。

2

「よくって半殺し……、大概是簀巻きにして、黄浦江経由で故郷へ送り届けてやるのよ。もっとも、そいつの故郷がどこかは知らねえがな。ククク……」

「事件にはならない、と？」

「ああ、ならねえよ。長江（揚子江）から海に出て、魚の餌だ。偶には、どっかの棒杭に引っかかることもあるが、公安も乞食と知れば流れに押し戻して、それで終わりだ」

確かに、乞食同士の喧嘩や抗争がニュースになったなどと聞いたこともない。

妖の前のボス、龍の死も闇から闇に葬られたのだろう。

「それでも場合によっちゃ、公安が絡むこともあるわけだ」

「そんなときは、どうするのですか？」

と問う織田に、やはり予想通りの返事が返ってきた。

「クククク……、そんなときのために、役人にはたつぷりと鼻葉を嗅がせてある。もし、俺たちが喋ったら、いつてえ何人の役人がコレになることか……。上海市政府も北京の中央政府も空っぽになるンじゃねえかあ。ガッハハハッ……」

この話は満更ハツタリでもない、と織田は思った。

なぜならば、妖の話から組織の規模が推測できたからである。

数十万の乞食の頂点に立つ帝王、影の国家主席と敬われる男に、織田はますます会ってみたいと思った。

戸籍を持たない、つまりこの世に存在しない命知らずの数十万人の集団、ある意味では軍隊よりも恐ろしいのではないだろうか。

「どうだ、ますます興味が出てきたって面だな」

妖は実に勘の鋭い男で、織田の考えがことごとく先読みされる。

「仰る通りです。ますます会いたくなりました」

「そうだろう。クククク……」

「でもな、俺がいくらここのボスになったからといって、帝王と比べたら、鼻糞みてえなもんだ。簡単にはいかねえよ。もっとも、俺が上海地区をすべて仕切るようになれば、話は別だろうがな。クツククク……」

どうも、龍の死によって妖がすんなりと、今の地位に納まったわけではないらしい。

その点について、織田は踏み込んで訊いた。と、

「そりあゝ、そうだ。甘い汁の吸える地位だからな。狙っている奴は結構いたよ。まあ、だいたい片付いたから、ここにこうして、俺がいるわけだがな……」

「妖さんのボスからは、手助けはなかったのですか？」
と織田が訊くと、

「そりあゝ、まあ。俺は上納金以外にも金を貢いでいる。でもよ、最後は自分の力だ。自力で地位を掴んだ者だけ、上は認めるんだ」と拳を握り締めて、

「そのためには、いろんな根回しも必要だけど……」

と付け加えた。

最後に、妖が最も嫌がるだろうと思われる質問をぶつけてみた。

「龍さんは……もしかしたら、あなたに消された、のでは？」

怒り出すかと覚悟して訊いたのだが、妖はあっさりと答えた。

「まあ、あんたの想像に任せる。クククク……」

その言葉で妖の犯罪に確信を持つと共に、織田はアリバイ作りに利用されたのでは、との懸念も生じた。

「そうだ、もう一つだけ教えてください」

「なんだ？」

「いや、とてもつまらない質問なのですが……」

「いいよ。言ってみろよ」

「妖さんは、前の地位でも結構な身分だったわけじゃないですか。なのに、なぜ、朝早くから、あんな場所で物乞いをしていたのですか？」

「アハ、アツハハハハッ…、なんだ、そんなことか。習性かな、時々無性にあの仕事がしたくなるんだ。でもな、あんたは気がついてねえようだが、毎日俺だったわけじゃねえ。あんたと話をしたのは、確かに俺だけだな」

と言って、如何にもおかしそうに笑った。

そう言われてみれば、なにか雰囲気が違うと感じたことが幾度かあった。

「クククク……、影武者ってやつだ。あんたはこの顔だけに気持ちがいっていただろう。だから、少しぐれえ体格が違っていてもわからねえ。まあ、それが狙いでもあるんだがな」

その答えに織田は、得たいの知れない闇を覗いた気がした。

3

二〇〇五年十二月……。

それから一ヶ月ほど経過、季節は冬へと移り変わっていた。

或る日の午後、突然、といってもいつも突然だが、妖から電話がかかってきた。

『……俺だ』

こちらを確かめようともせず、いつもの調子である。

僅かな期待はあるにはあったが、もう電話はないであろうと織田は半ば諦めていた。

・・それにしても判で押したように、いつも一ヶ月の間を置くのはなぜだろう？・・

織田に新たな疑問が芽生えていた。

『あんた、今日、時間はあるかい？』

織田は夜の予定が入っていたが、大丈夫ですと応じていた。

『そうか。じゃあ、七時にいつものホテルに来てくれ。あんたの要望に応えられるかもしれねえよ』

と言って、例の如く一方的に電話は切られた。

・・もしや、影の国家主席と呼ばれる男に会えるかもしれない・・と期待しつつ、織田はホテルへと向かった。

いつものようにフロントに来意を告げると、これもいつもの如く妖の部屋にボーイが案内をしてくれる。

ドアを開けた妖に、

「よく来た、入れ」

と促され、織田は部屋に足を踏み入れた。そして、

「みなさん、お元気ですか？」

奥の部屋に向かって挨拶をした。

「ククッ…、猴が死んだよ」

妖から意外な言葉が返され、

「ウッ…」

織田は絶句した。

「ドジを踏んでな。相手も仕留めたが、自分も深手を負わされた。三日後にあっけなく逝っちまった。頼りになる奴だったが、まあ、生き死には紙一重、ってことだな」

妖が言うと言実味がある。

遺体はどうなった、と訊く気にもならなかった。

織田は、猴の死は龍の残党との抗争、或いは復讐の結果ではないかと推測した。

それにしても、乞食は物乞いで穏やかに暮らす人たちと考えていたが、それが間違いだったと気付かされた。

妖と出合ったことで、この世界がヤクザの世界に勝るとも劣らない、血の臭いの絶えない修羅の世界であることを思い知らされた。

前回のこともあるので、

・また利用されるのかも知れない・

との懸念もあったが、

・せっかくの機会だ、こっちも利用してやろう・

と考えた織田が、

「今日、呼んでいただいたのは、影の国家……」

と聞くのを遮って、

「気が早ええな。この前も言っただろう、直ぐはムリだな」

と言下に否定する妖の答えに、織田は失望を禁じ得なかった。

「がっかりするなって、あんたにはいい話だからよ」

妖は織田の心中を読み取るように、

「俺のボスにあんたのことを話したら、面白そうな男だなと言いつ出したのよ。どうやら、あんたに興味を持ったらしい。どうだ、会ってみるかい？ 損はねえと思うが……」

と言う。

妖は照れからそうゆう表現したが、織田のためにかなりそのボスと掛け合ってくれたのは間違いないだろう。

もちろん織田に断る理由はない。

また一步、謎の男に近づくわけだから……。

「一緒に飯を喰っていけよ」

と勧める妖に、どうしても外せない約束があるので、会社に戻る必要があることを伝え、部屋を後にした。

織田が部屋を出ると、

『なんだ、つまんねえなあ』

と、愚痴る妖の声が微かに聞こえた。

第四章 嘘と真

一、告白

1

二〇〇五年七月……。

テレビの音で松田は目が覚めた。

ソファに無理な姿勢で寝ていた所為で、首が少し痛かった。

どうやら夢を見ていたらしい……。白昼夢、それはとても恥ずかしい夢だった。

首をコキコキツと鳴らして起き上がると、汜莉は隣でまだ軽い寝息を立てている。

朦朧とした頭で時計を見ると、針は午後の七時を指している。

松田は静かに立ち上がって、台所へと向かった。

・・・ご飯は炊けているし、冷めた具材は既に煮あがっているので、温めてカレー粉を入れれば直ぐに食べられるな・・・

松田が台所で食事の準備を始めると、リビングからテレビ番組の音が聞こえてきたので、ガスを消してそっと汜莉に近づいた。

汜莉はうつすらと目を閉じている。

「もう直ぐ、カレーができるよ」

と松田が言うと、

「あッ！ 私、シャワーを浴びたい」

と驚くよりも早く、豊満な身体を惜しげもなく晒し、バスルームへと向かった。

十分ほどして、

「ああ、好い匂い。食べたら帰らないと……」

「そうか。……じゃあ、家まで送るよ」

「ほんと？ 嬉しい」

カレーがとても美味しいと、汜莉はお替りをして食べた。

「ごちそうさまでした。松田さん、とっても料理がお上手ですね」

「ハッハハハ……、カレーが一番簡単な料理だ。誰にでもできるよ」
「私にもできますか？」

「もちろんさ」

食事の後、リビングでくつろぐ二人……。

時刻は午後八時を過ぎていたが、汜莉はいつこうに帰ると言い出さない。

「まだ、いいの？」

と問う松田に、汜莉は、

「ベッドで少し寝てもいいですか？」

と言って、松田の返事を待たずにベッドに向かう。

「えっ……、あっ……」

仕方がないので、松田も再びソファに横たわった。

NHKニュースに視線を送っていたが、直ぐに睡魔が襲ってきたので、目覚し時計を十時に合わせた。

2

「ジリジリリイン！ ジリジリリイン！」

けたたましい騒音に、松田は弾かれるように起き上がり、

「十時だよ。もう起きないと……」

松田は、すっかり寝入っている汜莉の身体を揺すったが、

「う、ううーん……あと三十分」

と言って起きようとしなない。

「ほら、送るから、起きなさい」

泊めるわけにも行かないので、もう一度、今度は強く身体を揺すった。

しかし、汜莉は顔もあげずに、むにゃむにゃむにゃ……、後三十分と答えるだけ……。

そんな汜莉の耳穴に、悪戯心から松田はフツと息を吹きかけた。

「あっ、うッ！」

と呻き、

・・抱いて……・・

と、目を瞑ったまま呟く。

「えっ!？」

と驚く松田の顔を薄目で覗き見て、

「抱いて……」

と、今度は恥ずかしそうに囁いた。

そして、汜莉は松田の唇に唇を合わせた。

「うっ、だ、ダメだよ」

「松田さん、抱いて……ください」

汜莉が耳元で囁きかける。

・・据え膳喰わぬは男の恥・・

と、心が語りかける。

・・否、ダメだ・・

もう一つの心が拒絶する。

だが下腹部は正直だ、既に勃起し始めている。

松田もひとりの男だ、

・・怒張したモノを汜莉の狭間に思いっ切り突き立ててみたい・・

との衝動が勝りつつあった、が、男の矜持が、それをかろうじて思い留まらせた。

3

「なぜ、ぼくをデートに誘ったの？ 誰かに頼まれた……」

松田はずばりと切り込んだ。

「えっ、……」

「この際だからはっきり言うけど、どうも不自然だと思っていた。だって、お話があるから会いたいとか、会えば会ったで、ただお会

いしたかったとか、一度しか会っていないのに、誰だっておかしいと思うはずだよ」

「……………」

汨莉は俯いたまま、ひと言も発しない。

「今日だってそうだよ。部屋まで来てぼくのベッドに寝たり……、に、肉体関係を迫ってみたい……。普通は、あり得ない話だよね」
「……、でも、お会いしたかった、のは事実です……」

「ぼくに近づいた目的は、なに？」

松田は少し強い調子で言った。

「も、目的だなんて……、ただ私……」

「そうなの、あくまでもとぼける気なんだ」

「……………」

「あれじゃないの……、今ぼくが調べていることを知りたいんじゃないの？」

「うっ、……」

図星を突かれて汨莉がうろたえる。

「ふくん、やっぱりねえ。誰に頼まれたの？ と訊いても、答えられないか。答えなくてもいいよ」

「うっ、うっ、うううう……」

急に汨莉が泣き出した。

「こ、公安へ突き出してください。うっ、うっ、うわぁーん！」

と、布団で顔を覆って泣きじゃくり出した。

「そんなつもりはないよ。ねえ、誰に頼まれたのか話してごらん。なにか役に立てるかも知れないから」

「うっ、うっ、うっ、うううう……」

「泣かなくてもいいよ。ぼくは君を責めるつもりはない。どうせ誰かに唆されたンだろうからね。奴らの考えそんなことだもの……」

松田は遠くを見る眼差しを外に向けた。

「うっ、うっ……」

汨莉はまだしゃくりあげている。

「もういいから、帰りなさい。もう遅いから……、下まで送るよ」と優しく諭しても、汜莉は腰をあげようとはしなかった。

4

「……抱いて、……抱いてください」
消え入りそうな声だった。

「えっ、……」

「私を抱いてください」
今度ははっきりと言った。

「……」

松田は黙って汜莉を見詰めた。

「このままでは、私、帰れません」

今度は松田の目をキッと睨んだ。

「帰れない、ってどうゆうこと？」

「理由は、理由は訊かないで、私を抱いてください」
涙で滲んだアイシャドーがおかしかった。

「ぶっ…」

と、思わず松田が吹き出すと、汜莉が不満気な顔を向けた。

「ごめん、ごめん。ほら、顔を拭きなさい」

と、ティッシュペーパーを差し出した。

汜莉は涙を拭い、汚れたティッシュを見て、

「あッ！」

と叫ぶと、洗面所へ駆け込んだ。

ジャーッと、水道水の流れる音がした。

顔を洗ったのだろう。

決まり悪そうな表情で洗面所を出て来ると、

「恥ずかしい……」

とはにかみ、また難しい顔に戻った。

「ぶっ」

「うつ、うつ、うつ…、ぷッ！」

堪えきれなくなったらしく、汨莉もとうとう吹き出した。

「ハッハハハハ……」

松田は大声で笑い声を立てた。すると、

「アッハハハハ……」

汨莉も堰を切ったように笑い出すと、しばらくの間二人の笑いは収まらなかった。

NHK放送が無差別の殺人事件を告げている。

松田の耳に、途切れ途切れに事件の概要を告げる言葉が飛び込んできくが、全体の意味を掴むまでには至らなかった。そして静かな時が流れた。

「松田さん、……私、お話します」

汨莉が突然宣言すると、堰を切ったように話し始めた。

「ふん……」

ほぼ松田の予測通りの内容だったが、

・…どうもこれは、俺の想像を超えた、なにか途轍もない裏がありそうだ……

と窺わせるモノであった。

しかし松田は、汨莉を全面的に信用したわけではない。

汨莉もまた、父親の癌の手術費用のためとは言わなかった。

5

「話してくれて、ありがとう。でも、今度は君のことが心配になった」

「私なら大丈夫です」

気丈に汨莉は応えるが、

・…もしも汨莉の言っていることが本当で、俺に全てを話したことが知られたら、汨莉の身が危ない…
その懸念を察したのか、

「松田さん、心配には及びません。私は大丈夫です。もし、なにかあっても、それは身から出たサビです。仕方のないことです」

・私には出来ません、と今更言っても、許してくれる相手じゃなさそうだし……」

「さて、どうしたものか……」

「いいんです。ご心配なさらないでください。私、余計に惨めになります。家族のためとはいえ、松田さんを利用しようとしたのですから」

・家族のため、……なるほど。お金のために、そんなことをする人じゃないとは思っていたけど……。そうか、そうゆうことか・

「あっ、もう十一時。私、帰らないと」

いつの間にか外は激しい雨になっている。

夏特有のバケツをひっくり返したような激しい雨だった。

遠くで稲光が走り、後を追いかけるように雷鳴が聞こえてくる。

「……あっ、そうだ。この辺りは雨だとタクシーが捕まらないんだ。それに雷が近づいて来るから、止むまで待つしかないな」

「だ、大丈夫です。私、……田舎で慣れていますから、雷はちっとも、怖くないんです。あっ、キャーッ！」

突然閃光が走り、バリバリバリーツと生木を引き裂くような雷鳴が轟いた。

「うへっ、……じ、実は、ぼくも雷はだいい嫌いなんだ」

松田はリビングのレースのカーテンと共に、稲光が見えないようにと夏は使わない布地の厚いカーテンも閉めた。

外が見えなくなると、少しは気持ちいが安らぐが、カーテンの隙間から鋭く閃光が射すと、次に来る雷鳴を予測して身が硬くなる。やがて、

「バリバリバリーツ！」

と、先ほどに倍する雷鳴が轟いた。

・もう恥じも外聞もない・

松田はベッドルームに走り込んだ。

そして、窓のカーテンをサッと引いて、部屋を暗くしてベッドに潜り込むと、頭から夏掛け布団を被った。
子供のころのトラウマか、なんともみっともない格好だ。
カチャッとノブを捻る音がした。

6

「……松田さん。……松田さん」

暗闇を探るように氾莉が呼ぶ。

「あっ、うん」

「電気を点けます」

パチンとスイッチの音が響き、カチカチカチッと閃いて、パッと部屋が明るくなったのが薄い夏掛けを通して松田にもわかった。
布団から少し顔を出すと、ドアの前に氾莉が立っている。

薄目を開いて見たが、眩しさに直ぐに目を閉じた。

「私も怖い。布団へ入ってもいいですか？」

松田が答える前に、氾莉が布団に入って来た。

「あっ、うっ……」

と呻いて、松田は氾莉の身体に触れるのを避けるように身をずらした。

しかし氾莉は後を追いつ、松田の胸を両手で抱え込むようにして、顔を押し付けた。

初めは万歳の格好をしていた松田だったが、躊躇いがちに腕が下がり、やがて優しく肩に手を置いた。

氾莉の腕にキュッと力が入ると、松田もそれに応じるように少し力を入れていた。

「うっ、うっ、うっ……」

と、しばらくして忍び泣く声が漏れたので、想わず松田は抱き締めていた。

そして、胸に密着した顔を両手で包み込むと、そっと胸から離して、

その涙に濡れた顔を見詰めた。

「泣かなくてもいいよ」

と優しく諭すように囁いて、涙に唇を当てる。切なく悲しい味がした。

汨莉が下から松田の顔をジッと見詰めている。

松田は胸に迫るものがあり、その少し厚めの魅惑的な唇に、いつしか唇を重ねていた。

やがてどちらからともなく、舌を絡め激しく吸いあう。

二、越えた一線

1

松田の手が、汨莉の豊満な胸を弄り、蜜壺を捏ねる……。

汨莉の柔らかな手が、松田の硬く怒張したものを握り締め、前後に擦る……。

松田は身体を起こして体勢を整えると、亀頭部に蜜を塗りつけ、一気に膣に没していた。

そして腰を廻しながら身体を捻り、ベッド脇の机の引き出しに手を伸ばすと、コンドームを探り出した。

それで腰の動きが鈍くなったのか、汨莉は、

「もっと、動いて、もっとお〜」

と不満をもらす。

松田はコンドームを一個掴み出すと、グイグイと狭間に腰を押し付けてから、一気に引き抜いた。

「あッ！ ああっ…」

と叫んで、汨莉は薄目を開けた。

松田は手早く装着して、再び亀頭部で狭間を捏ねてから、今度はゆっくりと膣の奥深くまで没した。

「うつ、うううう…」

肉襖を貫いて行くときの、亀頭部に絡みつく感触がなんとも心地好かった。

再び膣に咥え込んだ汨莉は、満足そうに呻き声をもらし始める。

松田がヌポッ、ヌポッと出し入れを繰り返すと、汨莉は身体と声で大きく反応した。

それは棒のように硬直していて、肉襖に包み込まれる蕩けるような感触を感じない。

― 余りにも硬く勃起し過ぎると、快楽の感覚が鈍くなようだ。

松田は汨莉が十分に満足したのを確かめてから、両肩を掴み腰を激しく前後させて、一気に突きまくった。

・ハッ、ハッ、ハッ…、息が切れる。もう限界だ。でも、もう少しで絶頂だ・・

下半身に痺れるような快感が訪れ、やがてフィニッシュを迎える。

松田は何度も大きく深呼吸して息を整えた。

こうして二人は結ばれた。

時刻は既に十二時半を廻っている。

2

翌朝、松田が目覚めると、昨晚の激しい雷雨が嘘のように、窓からはガラガラした真夏の陽射しが射し込んでいた。

手を伸ばし目覚し時計を取った松田は、あっと声をあげた。

時刻は八時、いつもならとくに会社へ着いている時間である。

隣では汨莉がスヤスヤと寝息を立てている。

松田は慌てて身体を揺すったが、ううーんと寝返りを打つばかりで起きようとしてない。

そのときリビングで、松田の携帯電話が鳴り出したので、ベッドから飛び降り携帯を手を取った。

部下の段建筆からの電話だ。

「もしもし……」

松田は殊更落ち着いて、電話を受けた。

『おはようございます。総経理、どうしました？ 身体の具合でも悪いのですか？』

部下の段建筆の元気な声が耳に響いた。

「あ、い、いや。ごめん、寝坊しちゃって……」

『ハハハハ……、寝坊ですか。なあ、だ、よかった。いつも早いのに、心配しました』

心底安心した様子が、松田にも伝わってきた。

「心配かけて申し訳ない。昨日の晩、飲み過ぎて……これから直ぐに」

と答える松田の言葉を遮るように、

『お休みになればいいじゃないですか。総経理は全然お休みを取られていないでしょう。名古屋の連中なんて、ゴルフだなんだと、年がら年中休んでいるじゃないですか。まったく、遊びに来ているようなものです。お金ばかり使って……』

段が普段の不満をぶつけるように話し出した。

「まあ、そう言わないで。あっちの本社の連中にも、わかっているだろうからね」

『そうですかねえ……。要領だけはいいい連中だから……』

「うん、その件はまた話そう」

『あつ、すいません。とにかく、今日はお休みください』

「う、うーん……」

『大丈夫ですよ。私が遣っておきますから、今日は安心してお休みください』

松田は昨晚四回もセックスをした所為で、身体に倦怠感が残っていた。

それで、段の提言を受け入れることにした。

「わかった。それじゃあ、申し訳ないけれど、今日は休ませてもらうよ」

と答えると、そうしてくださいと言って電話を切った。

「松田さん……、松田さん……」

汜莉がベッドルームから呼んでいる。松田が、

「今日は休むことにした」

と伝えると、

「えっ、嬉しい」

汜莉が微笑んだ。

「君は昨日の晩、帰らなかったけど、大丈夫なの？」

「……私には、誰も心配してくれる人はいませんから……。今日の夜、仕事に行けば問題ありません」

3

時刻はまだ朝の八時を少し廻ったところだ。

松田はいつもの習慣もあって、もう一度眠る気にはなれなかったの
で、シャワーを浴びてから朝食を買いに行くことにした。

表に出てマンションの隣の公園に足を踏み入れた。

小さな公園だったが、緑が多いので、少しは空気が綺麗だろうと考
えている。

上海の空気はとても汚れていた。

― その証拠に、鼻毛の伸びるスピードが、東京よりもずっと早い。
上海の空には滅多に青空が出ない。

いつもどんよりとしていて、霞がかかったような空ばかりだ。

しかし今日は珍しく薄日が射していて、朝から気温もかなり高く蒸
し暑くなっていた。

歩いているだけで、じわっと汗ばんでくる。

平日の朝の公園は老人ばかり、太極拳に興じている幾つかの集団が
いる。

松田は、その中の最大グループの後方について動きを真似てみたが、
そのゆったりとした動きについていくことができない。

太極拳の動きは一見緩慢に見えるが中々難しい。

動きがおかしかったのか、隣のおばさんが笑っていた。

松田は公園の奥に進むと、池の縁のベンチに腰をおろし、タバコに火を点けた。

二十年以上も止めていたタバコを、最近になってまた始めてしまった。

合弁相手との軋轢、というのは言い訳だが、色々とストレスが溜まっている。

夏の公園は花盛りだった。

名も知らぬ色とりどりの花々が、今を盛りと競い合っている。

プーンと甘い香りが漂ってきて、鼻腔をくすぐった。

あちらこちらで老人の団が、なにごとか話に熱中している。

・息子の嫁の悪口でも噂し合っているのだろうか……

松田はしばらくボーッと過ごし、気がつくとも三本目のタバコに火を点けていた。

・一線を越えてしまった。まあ、俺も単身生活が長いからなあ……

……

と自らに言い訳をしていた。

・しかし、汜莉の話は本当だろうか……。罌、ということも十分に考えられる。だが、もし本当だとしたら……、彼女は仲間を裏切ったことになる。すると、彼女の身に危険が及ぶのではないか？……松田は考えを巡らす、実際のところはわからない。

・まあ、しばらくは様子を見てみよう。だが、これで奴らは自ら尻尾を出してくれた。俺が考えていた以上に、根は深そうだ。これは余程慎重にやらないと……

一時間ほど公園で過ごし、松田は近くの肯德基ケンタッキーの店に寄って、朝食セットを二人分購入した。

マンションの入口で、今日は休みかとガードマンから声をかけられたが、松田はあやふやな笑みで誤魔化した。

部屋に戻ると、汜莉はまだ寝ている。

時刻は十時半になるところだ。

・疲れているのだろう。女の身ひとつで、魔都の荒波に揉まれて
いる。いつ飲み込まれても不思議はない。もし俺が彼女の立場だっ
たら……・

松田は汜莉を起こそうかと思ったが、部屋を覗くと気持ち良さそう
な寝息が聞こえてきたので、そっとドアを閉めた。

テレビのスイッチを入れると、いきなり大音響が部屋に響く。

慌ててボリュームを下げた。

中国製のテレビは音量の調整がいい加減で、チャンネルによっても
番組によっても勝手に音量が変わる。

松田は少し早いかとは思ったが、冷蔵庫からバドワイザーを一缶持
ってきて、プシュッと封を切った。

汗をかいた所為で、冷えたビールが喉に心地良い。

上海には世界の著名ビールが出揃っていた。

総じてアルコール度数が低く、味もあまり代わり映えしないが、値
段は清涼飲料水と変わらない。

それと水に不安もあるので、松田は水代わりによく飲んでいた。

日本なら、朝からビールですか、よいご身分ですねなどと皮肉を言
われ兼ねないが、独り住まいの気楽さから、休日は朝からお世話に
なることが多い。

二缶空にしたところで、寝室の汜莉に声をかけた。

「……もう少し……今、何時？ ……じゃあ、あと一時間……」

・やれやれ、よく寝る娘だ・

松田はビールをもう一缶取り出し、買ってきた肯德基の朝食セット
を広げた。

三、突然の別れ、そして……

1

午後七時頃……、

「あっ、もうこんな時間、お店に行かないと……。松田さん、近くまで送ってくれる」

と汜莉が甘える。

二人は虹橋路でタクシーを降りて、汜莉が食べたいとゆう楊州麵で腹を満たし、夕月の手前で松田と汜莉は別れた。

別れ際に、

「もう会わない。さようなら……」

と言った汜利は、走って店の中に消えた。

松田は啞然とした。

冗談かと思ったが、その晩遅く携帯電話にメールを入れても返事はなかった。

翌日も朝から何度かメールを入れてみたが、とうとう返事は返ってこなかった。

もちろん汜莉の電話はオフのままである。

店に電話をしようかとも考えたが、それは止めた。

・・彼女の身になにもなければいいが……・・

と独り呟いた。

或る日の昼下がりの午後、総経理室でボーツと過ごす松田、机に置いた携帯電話が激しく振動した。

・・メールだ。……もしかしたら・・

松田は期待を込めて、携帯電話を手元に引き寄る。

『今天晚上，我想見面（今晚会いたい） 汜莉』

『我也想（私も） 松田』

と慌てて打ち返し、

『場所？』

と問う氾莉に、前回と同じ襄陽公園の入り口、時間は午後六時半と指定した。
松田はそれまで暗く沈んでいた気分が、パーツと明るく開けるのを感じた。

2

その晩、会わなかった日々を取り戻すように、二人は互いの肉体を激しく貪りあった。

二度目のセックスを追えた後、ベッドの中で、

「なぜ、もう会わない、って言ったの？」

松田が優しく囁きかけた。

「……好きに、……なっちゃいそうだから……、それに……」

消え入るような声で答え、氾莉は松田の胸に顔を埋めた。

「それに……？」

と問い返す松田に、氾莉は意を決したように語り出した。

「この前のことがあってから、私、松田さんのこと、本当に好きになってしまいかも知れないって思ったの。……だって、お父さんのような温かさを感じたんだもの」

「……………」

「私ねえ…、若い男の人はあまり好きじゃないの。松田さんみたいにどっしりとしていて、逞しい男の人が好き。でも、好きになっちゃいけない人だってわかっていているから、一度セックスをして、それでも会うのは止そうと思ったの……」

「そうか、それでしばらく会ってくれなかったんだ」

「でもダメだった。……会うのを我慢すればするほど、ドンドン想いが募って……。それでもう我慢の限界……」

氾莉の本心だった。

松田に接して情報を得ることを条件に、お金が貰える。

それが悪いこととは知りつつも、封筒に入った現金の重みに負けて

しまった。

病気の父親の手術費用が欲しかった。

父のためと心の折り合いをつけても、夜になると神に懺悔する。

そんな毎日だった。

・一層、松田に本当のことを話そうか……、もしかすると、松田さんなら理解してくれるかも知れない。……だが、それではお金が貰えなくなる・

母が父は手術をしなければ半年の命だと言っていた……。

始めはそのつもりで接したが、いつしか松田の魅力の虜となっていた。

「ぼくも会いたかった。もう君のことが頭から離れなくて、毎日が辛かった」

「私も、松田さんの顔を思い浮かべるだけで辛くて、……このまま、どこか遠くへ行ってしまうかとも考えたけど、それはもっと辛いことだと気づいたの……」

その言葉で松田に打算が働いた。

「時々会おうか？」

「……でも、私、遊びじゃ嫌よ」

「遊びじゃないよ」

「でも、結婚はできないでしょう」

「そ、それは……」

「ねっ、男の人ってズルイ」

松田は心の底を見透かされた気がした。と、

「それでもいいの。その代わり、私を一番大切にして。奥さんよりも娘さんよりも……」

と言って松田の手を握りジッとその目を見詰めた。

「今は君がぼくにとって、一番大切な存在になった。嘘じゃない」

「ほんと、絶対嘘じゃないよね。ねっ？」

と抱きついた。

「嘘じゃないよ。君を上海で一番幸せにするよ」

「否ッ！ 世界一じゃなきゃ、否ッ！」

「うん、わかった。世界一幸せにする。約束する」

松田はそれを証明するとばかりに、きつく氾莉を抱き締めた。

3

「お父さんの手術、上手くいったらしいわね」

他に人がいないのを確かめてから、張英が話しかけてきた。

「あつ、はい、お陰様、で……」

「良かったわね。……ところで、あっちも順調のようね。どお、あれからなにか新しい情報はつかめた？」

「えっ、いえ、あれからは、なにも……」

声のトーンを落として答える。

「従業員の女の子が松田に、商品の仕入れ価格がおかしいって報告したのよねッ！」

張英が、はっきりしない氾莉の態度にイラつくように語気を荒げて言った。

「は、はい。ま、松田さんが、前にそう言っていました」

「で、彼はそれからどんな動きをしているの？」

「それからは、なにも聞いていません」

「そこからが大切なんじゃないの。しっかりと聞き出さない」と、再び語気を荒げる。

「でも、私から、あまり突っ込んで聞くのも、おかしいし……」

「それはそうだけど、ちょっと頭を使いなさい。もたもたしていると、私が怒られるンだからね」

「はい」

「もうしたンでしょう、セックス」

「……………」

「知らないと思っているの……、貴方、彼の家に泊まったりしているでしょう。ちゃんと報告があるのよ。バカね、放し飼いにすると

でも思っているの。いい、はっきり言うけど、アンタはもう私たちと一連托生なの。そのことを忘れるんじゃないよッ！」

「……えっ、い……」

「もうお金を受け取っちゃったんだからね。フフフッ…、返すだって、バカ言っているんじゃないわ。返して済む問題だと思っているの……、あんたはもう仲間なのよ」

汜莉は張英の激しい物言いに恐怖した。

・・なにか、とんでもないことに巻き込まれてしまった。張英は優しい人で、父のことを本気で心配してくれていると、単純に思っていたけど、違うんだわ。松田さんにも迷惑をかけてしまう。ああ、どうしよう……？・・

独りになると罪の意識に苛まれ、汜莉は十字を切って神に懺悔の祈りを捧げた。

第五章 love-story? (織田の純情)

一、妖のボス王^{ワシ}

1

二〇〇六年一月一日、元旦……。

織田が部屋で独り御屠蘇気分に使っていると、午後になって妖から電話が入った。

どうせあっても妖からの連絡は一ヵ月後と踏んでいたので、織田は驚かされた。

「今日はお正月ですけど……」

と戸惑う織田に、

『中国人は春節が正月だ。元旦は関係ねえよ』

と、にべもない。

「いつものホテルですね」

と確認する織田に、

『違うよ、今日は“錦江飯店”^{ホテル}の中華レストラン“夜上海”に六時だ』

という答えが響いて、妖からの電話は切られた。

「老錦江の夜上海か、……ならば会社の近くだ」

織田も何度か食事をしたことがある。

指定の時間より十五分ほど早くホテルに着いた織田は、ロビーでタバコを吸いながら妖の到着を待っていた。

しかし、約束の五分前になっても妖は姿を現さない。

それで織田が夜上海のマネージャーに確かめると、

「もういらしています」

と答えて、小姐(女性従業員)を呼び、

「お客様をお部屋へご案内するように」

と指図した。

「こちらでございます」

と、小姐が個室のドアを開けると、既に五人の客が丸テーブルを囲んでいる。

「おお、来たかる来たか。あんたの席はこっちだ」

と妖が、満面に笑みを湛えて声をかけた。

織田の席として、ドアから一番遠い上座の隣が空けられている。

「みんなを紹介しよう。うちの幹部連中だ」

と、妖は端からひとり一人織田に紹介していく。

妖の紹介を受けながら、織田は名刺を差し出し、全員と短く言葉を交わしていった。

・・趙、袁、諸、馬、妖を入れて五人だ。上海のボス連中か、まだ大ボスは来ていないようだ・・

織田は名乗られた名前と顔が一致するように、頭の中で暗唱していた。

「ボスはまだだ。なにしろ忙しいお方だからな。クククク……」

と妖が笑って言うのと、それと合わせるように他の四人も声を立てて笑う。

織田は一番新しいはずの妖の機嫌を、他の四人が取り持っているような印象を受けた。

2

間もなく若い男がドアを開け、

「ご到着です」

と告げると、部屋に緊張が走った。

織田もその雰囲気飲まれ、緊張で身体を強張らせる。

隣の最上席に腰をおとした男はとも小柄だったが、他の五人の小ボスと違い表面的には身体に異常がないように見受けられた。

付き従って来た男たちの三人は部屋の外へ、二人はその男の席の後

ろへ仁王立ち。

「ボス、この男がお話した日本人の織田です」

「むっ…」

妖の突然の紹介に、織田は弾けるように立ちあがって名刺を差し出し、

「お、織田、実です」

と名乗りながら、深々と頭をさげた。

しかし、その男は立ちあがろうともせず、受け取った名刺に一瞥をくれ、席の後ろに控える男に渡した。そして、

「王だ」

と名乗ると二本の指を立てた。

「？」

すると、後ろに控えたもう一人の男が、サッとその指にタバコを挟み込んだ。

名刺を受け取った男が慌ててポケットを探るが、そのタイミングが遅かったようで、王の表情に不快感が浮かんた。

それを見て取った織田が、隣からサッとライターを差し出すと、一瞬怪訝な表情をしたが、ニヤリと笑い、差し出したライターの火にタバコを近づけた。

王が満足そうに頷き軽く顎をしゃくると、後ろの男が仰々しく織田にもタバコを一本差し出した。

すると隣の男が、今度はいいタイミングで織田のタバコに火を点けた。

「妖、メニューは？」

「はい、ボス。最高級の料理を言いつけてあります」

メニューに一通り目を通した王が、よしと頷いた。

それを聞いた妖の表情に安堵が浮かぶと、他の四人の表情も幾分和んだようだった。

間もなく十種類以上の前菜が次々と運び込まれ、テーブルの上にズラリと並べられたが、直ぐには誰も手をつけようとしなない。

王がタバコを一服するたびに、後ろから灰皿がサツと出される。織田にも同じように対応してくれるが、反ってわずらわしい。

3

やがて王が料理にひと箸つけると、他の五人も箸を伸ばす、王が箸を休めると他の五人も休める。

織田もそのタイミングを見計らって料理を口に運んだ。

・なんだか、食べた気がしないな。それにしても、こちらから話しかけていいものかどうか、前もって妖に聞いておけばよかった・モジモジする織田の気持ちを察したように、妖がタイミングを計って、

「ボス……」

と声をかけた。

「うん……?」

ゆったりと妖に顔を向ける王。

「その日本人がお話した男です。ボスにご相談したいことがあるそうで、話だけでも聞いてやっていただけませんか?」

フカヒレの姿煮を口に運びながら、鷹揚に頷いた王が、

「相談……、なんだ、言ってみろ」

と織田の目を見た。

王は小柄で華奢な身体つきだったが、その眼光は鋭く、ジーツと見詰められると、並みの神経の持ち主では緊張でぶっ倒れていたかもしれない。

しかし、織田は決して目を逸らさなかった。

背筋を冷や汗が伝ったが、腹を据えて、

「はい。実は……、か、影の国家主席と呼ばれる方に、会わせていただきたいのです」

と言い切った。

織田の顔を見詰めていた王が、突然、ファッ、ハハハ……と大声で

笑い出した。

「帝王に、ハア、ハハハッ…、あんた、いい度胸をしている。フフフ…、いや、気に入った、気に入った。ハア、ハハハッ…」

「そ、それじゃあ」

「あんたのその度胸に免じて、叶えてやろう」

「ほ、本当ですか？」

・・バツ、バカ・・

と妖が呟いた。

「フフフフ…、妖、いって」

妖が冷や汗を拭いていた。

「ありがとうございます」

その場の空気を読んで、織田は立ちあがると深々と頭をさげた。

「フフフフ…」

王は燕の巢のデザートを綺麗に平らげると、

「話はそれだけか…。そうか、後は妖に訊いてくれ」

と言って立ちあがった。

慌てて全員が立ちあがり見送ろうとすると、

「いいから、おまえらは客人とゆっくり食事をしてくれ」

王の後ろには、入って来たときと同じ五人の男が従っている。

織田も五人のボスたちと同様に、腰を折ったままの姿勢でしばらく見送った。

4

「ふうう……」

妖が大きな溜め息をつくとき、他の五人も安堵の表情を浮かべ、同じように大きな溜め息をもらした。

「さうて、それじゃあ、料理を運んでもらおうか」

妖が小姐に指図する。

重石の取れた五人のボスたちは急に開放的になり、賑やかな宴会が

始まった。

六人はビールにワイン、紹興酒と杯を重ね、

「^{バイジュウ}白酒”だ、“^{ウーリヤンイエ}五糧液”を持ってこい」

と、誰かが叫ぶ。

直ぐに小姐が、箱に入った五糧液を二本に、小さなグラスを六個携えてやって来た。

・・これは効くんだよなあ…。参ったなあ…。・

思わず織田は呟いていた。

箱を開けてラベルを確認した妖が、

「これはダメだ。一番強いやつを持ってこい」

と命じると、小姐は五人の異様な人相と風体に恐れをなし、慌てて部屋を出て行った。

それも仕方のないことで、五体満足なのは織田だけなのだから。

妖の顔は爛れたケロイド、趙は隻眼、袁はゴリラのような大男だが左足がない、諸は左手がなく、馬は名前の如くの馬面で、唇が紫色に変色して異様に膨れあがっている。

こんな中に放り込まれたら、若い娘は失神する。

小姐に代わってボーイが持ってきた白酒を手にとった妖が、

「よしよし、これだ」

と呟き、

「おう、日本人。先ずは俺と乾杯だ」

拒むことはできないので、織田は腹を括った。

本気で呑めば織田は相当強い。

グラスは小さいが六十度超の酒はきつい、況してや飲み慣れていない酒だ。

五人と一杯ずつ乾杯しただけで、織田の目は虚ろになった。

腹に食べ物があり入っていないだけに、酒の回りが余計に早いのだ。

次々と差し出されるグラスを、織田は几帳面にもことごとく受けていた。

「日本人、中々やるじゃねえか。よし、もう一度乾杯だ」

「おゝし……、ま、負け……ない……ぞおゝ」

もう呂律が回らない。

「ハッハハハッ！」

と豪快に笑う妖の声を最後に、織田の意識は途絶えた。

二、媚薬

1

織田はゆっくりと目を開けたが、真っ暗でなにも見えない。

身体を起こそうとしたら、頭にガンと激痛が走った。

それでもう一度ゆっくりと枕に頭を沈めてみたが、頭はズキン、ズキンと脈打つように痛む。

「メガサメマシタカ？ アツ、モウスコシ、ネテイタホウガ、イイデスヨ」

女性のたどたどしい日本語が聞こえてくる。

「えっ？ ここ、どこ？」

「ワタシノヘヤデス」

女性の声に織田は驚いて、半身を起こし声の主を探した。

頭は痛かったが、意識ははっきりしている。

段々に目が暗闇に慣れてきたようで、部屋の隅の方に、ボーツと人の姿が浮かびあがった。

「誰？ 電気をつけてくれない」

と織田が言うと、ハイと返事をしてイスから影が立ちあがった。

影が部屋のドアの方へ移動するとパチンと乾いた音がして、一瞬の間を置き、チカチカツと閃光を発してパツと蛍光灯が灯った。

「うッ！ ……」

眩しさに、織田は思わず目を瞑り、瞼をゆっくりと開いていく。

女が近づいて来た。

織田は警戒したが、この状態ではどうしようもないと諦めた。それに反し、女は優しかった。

「オダサン、ダイジョウブデスカ？」

「君は……？」

「リー（麗） トモウシマス。ヤオ（妖） カラ、オダサンヲミルヨウニ、イワレテイマス」

・・そうか、乾杯していて途中で意識を失ったんだ・・

「ムリシテハダメデス。パイジュハ、トテモツヨイオサケデス」

「レイさん、甘えついでに水を一杯いただけませんか」

「ハイ、スコシオマチクダサイ」

麗が部屋を出て行った。

・・ふうう、参った。完全に二日酔いだ。今、何時ごろだろう・・

織田には、昼間なのか夜なのかさえもわからなかった。

「あれ？」

左手首に目をやったが腕時計がない。

間もなくドアがノックされ、麗が水と薬らしきものを持って部屋に入ってきた。

「ハイ、オミズデス。ソレトコノクスリ、フツカヨイニキキマス」

水はともかく、得たいの知れない薬に抵抗はあったが、織田は麗から勧められるまま錠剤を二錠口に含んだ。

チャイナドレスに身を包んだ麗はとても美人だった。

身体にぴたりとフィットしたドレスは、一層その肉感的な身体を引き立たせている。

2

三十分ほどすると、織田に欲望が湧きあがってきた。

下腹部が徐々に熱くなってきたと思ったら、分身が勝手に反応し始めている。

それを見透かしたように、麗がドレスを脱ぎだした。

「えっ!？」

チャイナドレスをハラリと床に落とした麗は、その下になにも着けていなかった。

・ ・ ・ 綺麗な身体だ ・ ・

肌は透き通るように白い。

胸の膨らみは理想的な大ききで、乳首がツンと上を向いている。

腰はキュツとくびれ、その下に薄い陰毛が茂っている。

織田の戸惑いをよそに、麗はベッドにスルリと入ると、肩肘を立てテ左の乳房を織田の顔に近づけてきた。

織田はむしゃぶりついていた。

既に、どうしようもないほど分身はパンパンに怒張している。

織田は激しく吸い、軽く歯を立て、コロコロと舌先でピンク色の小さな乳首を転がした。

「あうっ、うっ、……うううう」

と麗は必死に声を押し殺している。

織田は、麗の身体が小刻みに震えているような気がしたが、もう誰もその欲望の昂ぶりを止めることはできない。

織田は麗の上に乗って両乳房を揉みあげ、唇を吸い、口に舌を挿し込み捏ね廻した。

「うっ、うっ、うううう……」

必死に堪える麗の呻きが、一層織田の欲望を煽る。

手を桃の丘に這わし、忙しく二指で割った。

そして中指で割れ目を掻きあげると、指に僅かな滑りを感じた。

潤みの少なさを意外に思った。

それで織田は、殊更優しく割れ目に触れ、ゆっくり、ゆっくり指を挿入していく。

「あうっ……」

と麗は声を立て、顔をしかめるのがわかった。

・ ・ ・ もしかしたら、この女……

との疑念が織田の頭を過ぎる。

それで、織田は身体を下にずらすと、一気に口を割れ目に持っていた。

麗は、あっと声を発し股を閉じようとする。

「ダ、ダメエーッ！」

と叫んで身体を捻り、織田の舌から逃れようとする。

しかし織田は、顔を麗の股に挟まれるようにして、割れ目に舌を這わせ続けた。

次第に麗の力が抜けていく。

舌を尖らし壺に埋め、舌先で軽く敏感な肉芽を突つつき、全体をザラザラした舌の部分で舐めあげる。

と、麗は、

「ヒィーッ！」

と小さく悲鳴をあげた。

だが織田は、がっちり太ももを抱えて逃がさない。

「うっ、うううう…」

麗の股から力が抜けていく。

頃合はよし、織田は身体を起こし、怒張した分身を割れ目に宛がうと、一気に腰を突き出した。

「アヒィーッ！」

今度は絶叫を発した。

織田は慌てて口を押さえた。

「アッ、イタイッ！ ヤメテ、ヤメテ、イタァーイ、イタァーイ…」

麗の声が泣き声に変わり、逃れるように腰をずりあげていく。

織田が挿入を繰り返す中で、自身の肉茎の付け根辺りを垣間見ると、紅い、やはり女は処女だった。

処女と接するのは初めての経験だった。

早く済ませてやろうと、激しく動くと、余計に悲鳴をあげる。

一瞬途中で止めようかとも考えたが、織田のモノは痛いほどに怒張

していて、どうにも昂ぶりが収まらない。

・さっきの薬の所為かもしれない・

肉茎の根元によく疼きが生じてきたので、織田は激しく腰を打ち付け、刹那にググツと突きあげて、強かに放出した。

「ギャーッ！」

と叫んで麗は気を失った。

3

痺れるような快感が織田の脳天を突き抜けたが、その余韻に浸ることなく急いで引き抜くと、割れ目から鮮血がほとばしった。

それは見る見る敷布を染めていくので、織田は慌ててティッシュを探す。

意識の戻った麗は、呆けたような表情でぐったりとしている。

頬を一筋の涙が伝わった。

織田がティッシュを数枚抜き取り、麗の下腹部に宛がうと直ぐに鮮血に染まっていく。

それを三度繰り返し、ようやく血は止まったようだ。

一度放出して落ち着きを取り戻した織田は、

「だいじょうぶ？」

と、照れ笑いを浮かべながら聞いたが、麗は虚ろな目で、放心したように織田を見るだけだった。

しばらくしてようやく身体を起こした麗が、緩慢な動きでベッドを降りようとして、その顔を苦痛に歪めた。

・処女だったとは……、可哀想なことをした・

と、思ったのもつかの間、織田のモノが再びムクムクと頭をもたげ始める。

・なにかの媚薬か？ 今までこんなことはなかった・

麗がベッドの端に腰を下ろし、立とうとしたその瞬間、織田の手が伸びてもう一度ベッドに引き込んでいた。

「アッ、ヤメテエーッ！」

麗が手を振り払おうとしたが、そのとき織田は獣になっていた。潤みも確かめず、怒張したモノを再び蜜壺に突き立てる。

織田は事が済むと冷静になるが、勃起すると心は獣に変わった。

・ ・ ・ どうしたんだいったい、自分でも抑えが利かない・ ・ ・ 薬の効き目は異様なものだった。

麗はベッドの隅にうずくまって動かない。

啜り泣きが聞こえた。

妖に命じられて来たのだろうが、二度の契りを交わしたことで、織田にはいつしか麗に対する思い遣りの気持ちが生まれていた。

二度の放出で、どうやら薬の効き目も薄れてきたようだ。

隣にうずくまる女の匂いに、三度頭をもたげてきたが、今度はなんとか自制が効いた。

「怖がらないで、もうしないよ。シャワーはあるかい？」

返事はなかったが、麗がモソモソと動く、起き出そうとしているようだ。

シャワールームで、織田は己の過ちを洗い流すように、頭から熱い湯を浴び続けた。

4

二〇〇六年一月二日の朝、織田は昨日の記憶を辿っていた。

・ ・ ・ 昨晚、妖のボス王が、影の国家主席と敬われる男に会わせると約束してくれた。・ ・ ・ 確か、後は妖に相談しろと言っていた・ ・ ・ そこまでははっきりと覚えている。

その後、求められるまま白酒で立て続けに乾杯に応じ、意識をなくした。

気がつくとベッドの上、部屋には麗と名乗る女がいた。

麗が持つて来た二日酔いに効くという薬を飲んだら、その後異常な性欲に襲われ、麗を二度も犯してしまった。

性欲が昂じてくると、なぜか自制が利かなくなった。

麗は処女だった。

・・麗に悪いことをした。とにかく、妖に電話をしてみよう・・
『おう、妖だ。ククククッ…、どうだった？ 好い女だったろう。
クククク…』

「葉の所為とはいえ、麗さんに悪いことをしたと思っています」
織田は多少の皮肉を込めて言ったが、

『二度もしたらしいな、あんたも男だったな。クククク…』
と妖は意に介さず、笑った。

「彼女に会わせてください。お詫びをしないと…」
と織田が言うと、

『そんな必要はねえ。それより、帝王と会う手順だが…、一ヵ月後に上海に来る予定になっている。但し、はっきりした日程は、数名の大幹部が知っているだけだ。日程も宿泊場所も、なにかにもが秘密だ』

と応え、

『いっどこから弾が飛んでくるかわからねえ。まあ、考えてみれば、大物になるってのも大変だ。なゝあ、あんた。クククク…』

妖の話では、一ヶ月後、ということぐらいしかわからないとのことだった。

『状況が整ったら電話を入れるから、なにを置いてもそのときは出て来い』

とのことだった。

織田は、わかりましたと答え、麗に会わせて欲しいともう一度懇願した。

すると、

『俺のボスに会わせろの、帝王に会わせろのと言ったと思ったら、今度は女に会わせるとききたか。まったくうるさい奴だな』
と呆れたように呟き、

『わかった。これから会わせてやるから、直ぐにいつものホテルへ

来いッ!』

と怒ったように言って電話を切った。

三、織田の純情

1

織田実は直ぐに事務所を飛び出し、地下鉄に駆け乗った。

ホテルのフロントで来訪を告げると、いつものボーイが妖の部屋まで案内してくれる。

案内してくれるのがいつも同じボーイであることに、織田は初めて気づいた。

部屋に招き入れられた織田は、挨拶よりも先に部屋の中をキョロキョロと見廻していた。

「女のことになるようだな。惚れたか、クククッ…」

「いや、あの……」

織田は凶星を突かれ、顔を赤らめた。

しかし妖の次の言葉が、織田の淡い想いを吹き飛ばしていた。

「あの女は龍の娘だ」

「えッ! あの、殺された……」

「しっ、……滅多なことはいうものじゃねえ…。おいッ!」

と、妖が隣の部屋に向かって声をかけた。

すると、小柄で右足の不自由な男に腕を取られた麗が、俯き加減に顔を伏せて出て来た。

織田の顔を見て、あっと叫ぶと、女は直ぐにまた顔を伏せたが、その表情に微かな喜びが浮かんだのを、織田は見逃さなかった。

それで織田は愛しさが込みあげてきた。

自分の心にしこっていた想いの原因が、今はっきりとわかった。

織田は麗に恋をしたのだ。

たった一夜の契りだったが、それで十分だった。

――恋に理屈はいらない。

「おい、放せッ！」

麗の腕をガッチリ掴んでいる小男に、織田は強い口調で言った。
すると男は、指示を仰ぐように妖の顔を見る。

妖が軽く顎をしゃくると、男は織田をジロリと一瞥してから腕を放した。

「笙、向こうへ行っている。麗は、そこへ座れ」

と妖が命ずると、笙シエンと呼ばれた男は妖に頭を下げて、もう一度織田に鋭い視線を投げ、出て来た部屋へ戻って行った。

「あんた、言葉遣いに気をつけた方がいいよ。笙は怖い男だ。あいつが切れたら、俺でも抑えが利かねえ。あいつの笙は天下一品だ」
「笙、ですか？」

「ああ、そうだ。笛みてえなもんだ。……だが、奴が笙と呼ばれるのは、他にも理由がある。まあ、それは聞かねえ方がいいだろう。クククク……」

あの男は笙の名人で、地虫ディチョンと並んで稼ぎも多いとのことだった。

妖は猴フオウが殺されてから、地虫と笙をボディガードにしているようだ。
・ ・ いったい隣の部屋には、何人の男がいるのだろう・ ・

2

「ほれ麗、織田さんの隣に座れ。なんなら俺は席を外そうか……。ククククッ……」

「いえ、それには及びません。妖さん……、麗さんを……、麗さんを、私にください」

織田は意を決して、いきなり本題を切り出した。

「な、なにイーツ!?!」

麗も、えっ、という風に顔をあげる。

「麗さんと、結婚させてください」

織田は真剣だった。

「アハッ、アハッ、アッハハハッ…、なにを言い出すかと思えば、だから素人は……」

いやはや呆れたとばかり、妖は左右に首を振る。

一瞬喜びの表情を浮かべた麗だったが、あまりにも現実離れた話に、再び顔を曇らせて俯いた。

「本気です、麗さんと結婚させてください。お願いしますッ！」

自分でも思いがけない言葉だった。ただ詫びを言うだけのつもりだったが、麗の姿を見て、自分自身の想いがはつきりとしたのだ。

妖は織田の目をジューツと見詰めて、

「あんたは日本人だ。麗は、俺がゆうのもなんだが、乞食で戸籍もねえ。そんな女を嫁にできと思うのか？ 考えてもみなよ。……あんたには前途ってものがあるだろう。家族もいるンだろう。一時の感情で道を誤っちゃいけねえよ。抱きたくなったら、いつでも抱きやいいじゃねえか。なあ……」

と諭すように言った。

それはまるで、弟に語りかけるような物言いだった。

「私に家族はいません。天涯孤独の身です。会社を辞めてもいいと思っています」

きっぱりと言い切る織田に、

「……会社を辞めてどうする？ どうやって喰っていくつもりだ。まさか俺たちの仲間になろうっていうンじゃ、クククク……、それはねえよ」

と妖は、それを戒めるように語気を強めた。

「他に仕事を探します。なんなら、どこかへ行って、二人でひっそりと暮らします」

「……………」

無言の妖に織田は畳みかけるように、

「ぼ、ぼくは決めました。どんなことがあっても、麗さんと結婚し

ます！」

言葉を強めて言った。

「……ったく、……若い者^{モン}はしょうがねえなあ。だとよ、麗、おまえはどうなんだ？」

俯いたまま、顔を赤らめる麗、言葉は発しない。

「クククク……。どうやら麗も、おまえさんに惚れたようだな」

織田は麗の顔を見て、

「麗さん、ぼくと結婚してください」

と頭を下げた。……と、

「アッハッハハ……。とんだお笑いだ。おい、出て来オーい！」

隣の部屋から、へーいと応じる声がして、四人の男が顔を出した。

笙、地虫、聴^{ティン}、もう一人は初めて見る顔だった。

「笙と地虫、それに聴は知っているな。最後は黒^{ヘイ}だ」

織田は軽く礼をして、織田ですと名乗った。

聴はニコニコと愛想がいいが、他の三人は無表情だった。

「おい、おめえら、すっかり挨拶をしねえか、俺たちの仲間になるかも知れねえお方だ。クウクククク……」

と妖に言われ、三人は顔を見合わせた。すると、

3

一時の静寂の後、突然、

「クククク……」

それまで顔を伏せていた麗の口から笑いがもれた。

織田が怪訝な表情で覗き込むと、

「あんたも間抜けだねえ。黙って聞いてりゃ、笑わせてくれるよいきなりハスッパな上海弁で捲くし立てた。

「……………」

呆然と見詰める織田、麗は話しを続ける。

「結婚だって、誰があんたなんかと……わ、わたしは……、日本人は大っ嫌いだよ。笑わせないでおくれよ」

他の男たちも呆気にとられた顔をしている。

しかし、妖一人は違った。

「ああ、なにかと思えばくだらない。とんだ茶番だ、ねえ頭……。お陰で今日の稼ぎが吹っ飛んじまった。寝言はそれだけかい、ならわたしはもう行くよ」

と言った麗は席を立った。

「聴、おまえ送ってやれ」

妖が鋭く命ずると、聴は頷いた。

啞然とする織田を尻目に、麗と聴は部屋を出て行った。

それを見送った妖が、

「クククッ…、まあ、そうゆうわけだ。どうだ、一緒に飯でも喰うか？」

ガツクリとうなだれる織田の肩を、妖はポンポンと叩きながら、

「どうだ、一緒に飯でも喰うか？」

と訊いた。

だが、我に返った織田は、

「いえ、帰ります」

と小さく呟いて席を立った。

妖の、送らせるよという言葉は耳に入らなかった。

・あれは麗の芝居だったのではないか。だが、冷静に考えてみれば、結婚なんてできるはずがないんだ。住む世界があまりにも違い過ぎる・

織田は覚束ない足取りで、フラフラ歩きながら考え続けていた。

妖はその姿をホテルの窓から見下ろして、

・しかしバカな女だ。せっかく、この暗闇から抜け出せるかも知れねえチャンスを捨てやがって。麗は、本当にあの男に惚れたようだな。……まあしかし、それが正解かもしれないねえ。俺たちとじゃ、住む世界があまりにも違い過ぎらあな・
と呟いていた。

第六章 築かれた信頼

一、西安への旅

1

二〇〇六年一月二十九日、春節……。

松田幸夫と汜莉は、春節の連休を利用して、西安旅行のツアーに参加した。

西安は汜莉の故郷だ。

旅行の予約をしたのは汜莉で、日程は四泊五日、メインは“兵馬俑”と“華山”の観光だという。

松田にとって兵馬俑見学は、駐在を始めて以来の念願だった。

春節前日の二十八日早朝、二人は虹橋空港から西安空港へ向けて飛び立った。

他のツアーメンバーとは、西安空港で落ち合う。

飛び立って約三時間、ほぼ予定通り、夕方の五時半に西安空港へ到着した。

荷物を受け取り、預り証のチェックを受けてから、出迎えゲートを潜る。

中国の空港では、必ず荷物と預り証の確認がある。
それだけ盗難が多いということだろう。

出口には沢山の“導遊（添乗員）”が、それぞれの会社の旗をかざして、旅行者を待ち受けている。

観光客は自ら導遊を探すことになる。

「あれ、あれ、あの旗が私たちの旅行社です」

汜莉は、沢山の旗の中から目的の旅行社を探し出すと、そこへ向かって行った。

松田は旅行カバンを引きずり、人ごみを避けながら、慌てて後を追いかける。

導遊の周りには、既に数名の観光客がたむろしていた。

家族連れ、若い男女のカップル、韓国人らしい爺さんと若い娘の組み合わせ、それに得たいの知れない中年のカップルもいる。

・しかし考えてみれば、俺と汜莉の組み合わせも、得たいの知れないカップルの口だな・

松田は思わず苦笑していた。

待っている間に松田は、これから五日間一緒に過ごすメンバーの一人ひとりを観察した。

やがて汜莉が導遊と一緒に、みんなが屯する場所に戻って来た。

導遊が参加者全員の名前を読み上げ、

「全員揃いました。それでは私について来てください」

と言って旗を掲げ、駐車場へと先導して行く。

導遊の足は早く、遅れまいと必死について行くが、それぞれ大きな荷物を持っているので、人込みが邪魔をして中々進めない。

そんなことには委細構わず、導遊の持つ旗がドンドン遠ざかって行った。

もたつく松田を見兼ねたのか汜莉が、

「松田さん、私が荷物を持ちますから、添乗員の後について行ってください。それでバスの一番前の座席を確保してください」

と口早で命じた。

汜莉の目はマジだ、とても真剣な顔つきをしている。

こんなときは、決して逆らわないのが得策だ。

2

松田は慌てて導遊を追いかけ、指定の観光バスに乗り込んだが、既に前の方の席は他の観光客によって占められていた。

中ほどの空いている席に座ろうとすると、小生意気なガキが出て来て、

「ダメ、そこは私たちの場所よ」

と手を広げて遮り、松田を睨みつけた。

・ ・ ひっぱたいてやろうかな ・ ・

観光客は二十数名、中型の観光バスはほぼ満員になった。

松田がようやく確保した席にやって来た汜莉は、

「もう、ダメじゃないですか、松田さん……」

とガッカリした表情を見せた。

「だって、みんな凄いんだもの」

と、ニヤケタ表情で言い訳をする、

「中国人に遠慮していたらダメですよ。相手を掻き分けてでも奪い取らないと、良い場所は確保できませんからね」

と真顔で叱ったので、

「すいません、これから気をつけます」

と松田は身体を小さくした。

・ ・ 女は怖い ・ ・

と思わず呟いていた。

確かに汜莉の言う通りで、中国はどこでもそうだが、タクシーに乗るのも奪い合いだ。

決まった乗り場があるにはあるが、街中では早い者勝ちである。

退社時間に雨でも降り出そうものなら、目の前で乗客が降りるといった幸運にでも恵まれない限り、雨の中をトボトボと歩いて家へ帰る破目になる。

松田はそんな経験を何度もしていた。

やがて観光バスは動き出し、導遊がベラベラと日程の説明を始めたが、松田には訛りが強過ぎて、なにを話しているのか皆目検討がつかない。

それで汜莉に聞くと、

「ちょっと待って、全部聞いてから説明するから」

と素っ気ない返事が返ってきた。

・ ・ あれ、まだ怒っているのかなあ。しつこいなあ…… ・ ・

松田は心の中で呟いた。と、

「わかりました。これからホテルに向かって、チェックインを済ませた後で、食事をするためにレストランへ向かうそうです。明日の朝は七時出発で、六時半までに朝食を済ませてください、と言ってました」

どうやら汜莉は怒っていたわけではなく、訛りの強い導遊の説明を必死に聞き取っていたようだ。

汜莉は一旦怒り出すと怖いのが、実は竹を割ったようなサッパリとした性格と松田は捉えている。むしろ松田の性格の方が、ウジウジしているかもしれないと、近頃では反省している。

3

着いたホテルは、旅行社の謳い文句では、四つ星クラスのはずだったが、どう見ても精々三つ星、日本のレベルなら二つ星にランク付けされるだろう。

春節などの連休はどこも客で一杯なので、ダブルブッキングなどは当たり前、空いているホテルに押し込まれることになる。

しかし、観光客がブツブツ文句をいうと、差額の返金に簡単に応じてくれる。

食事を自分の都合で抜いても、相応のお金を返してくれたのには驚いた。

確かに、押しなべてサービスは良くないが、日本では考えられないような対応をしてくれることもある。

言わなきゃ、損、損、のお国柄である、不満はなんでも口に出した方がいいようだ。

なぜならば、彼らは確信犯なのだから……。

翌日の兵馬俑観光では、これでもまだ一部分だと言う導遊の説明を聞いて、そのスケールの大きさに圧倒された。

但し、ここで西安旅行について、詳しく述べるつもりはない。

ただ語っておきたかったのは、旅行の最後の日に登った華山での出

来事についてである。

それは中国を代表する五岳の一つと称される、華山に登ったときに起こった。

華山までは西安市内から高速道路を飛ばして、約一時間半の行程だった。

富士登山と同様、神聖な山ということから日の出を拝むために、夜中に歩いて山頂を目指す人々もいるが、松田は、

「日の出を見るために、夜中に歩いて登りたい」

と言い張る汜莉を説き伏せ、昼間に、しかもロープウエーを使う楽なコースを選んだつもり、……だった。

山の入口の大門から乗り場までは、比較的順調だったが、駐車場に近づく観光バスはピタリと動かなくなった。

嫌な予感が走る。

案の定、たった数百メートルの距離に一時間以上かけて、どうにか乗り場に辿り着いた。

導遊の説明では、ロープウエーは二時間待ちとのことだった。

「長いなあ……」

とは思いながらも、待つより他に選択の余地はない。

それで汜莉は、

「だから私が、歩こうと言ったでしょう」

と剥れている。

ロープウエーを待つ間中、松田は汜莉に責め続けられたが、今更歩いて登ることもできないので、なんとか汜莉のご機嫌を伺いながら、長い長い時間を、ただ無為に過ごした。

いくら観光シーズンといっても、異常な待ち時間の長さである。

入山制限をするとか、なにか方法があるだろうに……。

二時間のはずが実際には五時間待たされて、ようやく順番が廻って

きた。

勇躍乗り込んだ二人が、これで一気に山頂まで行けると考えたのは甘かった。

山頂といっても、東西南北に四つ頂があるのだ。

着いた場所は北峰、四つの峰の中では一番低い峰だった。

目的の東峰までは急坂を、まだ五百メートルほど歩いて登らなければならぬ。

東峰へと続く急な坂道を、蟻の行列のようにして登って行く人々の姿……、松田はそれを見ただけで戦意を失ったが、汜莉は、

「さあ、早く、早く」

と松田を促す。

人々は下から押しあげられようにして、石段を一步一步機械的に登って行くだけだ。

・・あれでは面白くもなんともないだろうに……・・

そこで松田は、混雑している東峰を避け、ガラ空きの南峰に登ろうと提案した。

すると汜莉は一瞬躊躇したが、

「それもそうね……」

と珍しく同意を示した。

人気の東峰に向かう観光客は多いが、南峰には僅かな観光客しかいなかった。

それで二人はマイペースで登ることができた。

一時間ほどで到着した二人は、山頂に腰を下ろして辺りの景色を眺めたが、南峰からは東峰が邪魔になって、周辺の景色がよく見えなかった。

それで汜莉は、

「あゝあ、やっぱり東峰に登ればよかったなあ……」

と愚痴をこぼしている。そして、

「ねえ、松田さん。せかくだから、あっちも登ろうよ」と言い出した。

松田がもつとも恐れていた提案である。

しかしここで逆らうと、また汜莉の愚痴を聞かされると考えて、松田は、はい、はいと嫌々ながらも同意した。

一旦北峰まで戻り、二人は東峰に登り始めた。相変わらぬの蟻の行列だった。

三百メートルはなだらかな傾斜だったが、残りの二百メートルは難関だった。

その地点に建つ休息所から眺めると、その石段は垂直に見える。

登って行く人たちの姿も、登り始めたことを後悔しているように見えて、なんだか痛々しい。

だが、一休みした汜莉は、

「さあ、登りましょう」

と、座り込んでいる松田の腕を引っ張る。

松田はもう一度その石段を眺めて、

「ダメだ、とても無理だ。俺はここで待ってるから、独りで行って来てよ」

とギブアップを宣言すると、

「うーん、もうう……」

と汜莉は不満の声をあげたが、どうやら諦めてくれた。

「じゃあ、行ってくるね。ここ動いちゃダメよ。上から手を振るから、写真を撮ってね」

と口早に言い置いて、蟻の列に加わっていった。

「ふーう、やれやれ……」

と松田は、大きな溜め息をついた。

中段辺りまで登った汜莉が、松田のいる休憩所を見下ろして手を振ったので、松田はその姿をカメラに収めた。

やがて汜莉の姿が松田の視界から消えた。

松田の足元に、二本、三本とタバコの吸殻が増えていく。

小一時間が過ぎたろうか、汜莉が駆け戻って来て、

「松田さんも来れば良かったのに、物凄くいい眺めだったよ。さっ

きとは全然違った。ねえ、写真は撮ってくれた？」
と、息を切らせながら一気に喋り続ける。

「ああ、撮ったよ。そう、良かったね、そんなに綺麗だったんだ」
「うん、ほらほら……」

と汨莉は撮ってきた風景を、デジタルカメラの画面に映し出して見せる。

「ほーう、なるほど、確かに綺麗な景色だ。いい写真が撮れたね」
松田が褒めると汨莉は、

「私、巧いでしょ」

と、さも満足気にいい、悪戯っぽく、フフフツ…と笑った。

二、遭難

1

「さあーて、そろそろ戻ろうか？」

と松田が言くと、

「今、何時ごろ？ ……そう、三時。じゃあ、そろそろバスに戻り
ましょう」

汨莉は満足したらしく同意した。

二人が北峰のロープウェー乗り場に着くと、既に待ち人で長蛇の列
が出来ている。

狭い山頂は人で溢れ、登りを待っていたときより人が多いように思
えた。

係員に訊ねると、また二時間待ちとの答えが返ってきた。

「ええ……、とゆうことは、また五時間だ」

と松田と汨莉は同時に、不満の声をあげていた。

「汨莉、下まで歩いたらどのくらい時間がかかるか、係員に訊いて
みてくれない」

うんと頷いて、汜莉はもう一度係員のところへ向かった。

「一時間もあれば降りられるそうよ……、歩こうか？」

行列の長さに嫌気のさした人たちが、どんどん降り口に向かって歩いて行く。

「そうだね。ここで何時間もボケーツと待つよりも、一時間ぐらいなら歩こう。それに随分歩いて下りる人も多いようだしね」

――この決断が大きな間違いのもとなった。

松田が最初の石段を降りると、次にほぼ垂直の坂が出てきた。

一人ひとり順番に、手すり代わりに吊り下げられた鎖に、しがみつくようにして下りて行く。

「うへえ……、これはきつそう」

と思わず松田がもらすと、

「あら、面白そうじゃない。私、こゆうのだからいいすき……」

汜莉は嬉々として答える。

松田の番になり、慎重に慎重に下りて行ったのに、最後の一步を飛び降りてしまった。

足に衝撃を感じたが、そのときは足首を捻ってみても痛みを感じなかった。

「大丈夫？」

と心配する汜莉に、松田は、

「大丈夫、大丈夫」

と手を振って応えたが、これが後になって利いてくる。

次々と出てくる難所に、松田は歩き始めて直ぐに後悔していた。

「もう少し行くと、楽な道になるからね」

と言う汜莉の励ましの言葉だけを頼りに、一步一步足を進めた。既に二時間が経過し、松田の足は限界に近づいていた。

汜莉が途中で杖になる枝を拾ってくれた。

一歩踏み出すたびに、松田の足はガクガクと震える。

汜莉は松田の左腕をしっかりと抱え、支えてくれていた。

かなり負担のはずだが、ひと言も弱音を吐かない。

松田は必死に歩を進めようとするが、太腿がワナワナと震えて、次の一步が中々踏み出せなくなっていた。
道は舗装されていたが急勾配で、膝と太腿に負担がかかる。
左側は崖になっていて、踏み外したら命の危険さえ感じられた。
で、とうとう松田は、
・・ああ、もうダメかもしれない・・
と、呟いてしまった。

2

「大丈夫。松田さん、大丈夫。私が支えるから、絶対この手は離さないから。もし松田さんが下に落ちたら、私も一緒に落ちる。もし松田さんが死ぬなら、そのときは私も死ぬから……。ねっ、大丈夫、もう少しだって、擦れ違った人が言っていた。頑張って、絶対離さないから、ねっ」

汜莉が必死に励まし続けてくれる。

それで、挫けそうになる松田にも氣力が湧いてきて、もう少し、もう少しと自分を励ましながら、どうにか歩を進めていた。

汜莉の手は、松田の腕をしっかりと抱えて離さない。

・・汜莉も相当疲れているはずなのに……、俺が頑張らないと・・

「もう少しよ、松田さん。頑張って、落ちるときは一緒だからね。もっと私に身体を預けても大丈夫だよ」

と言って、抱える腕に力を込めた。

「ありがとう。頑張るよ……」

松田は涙が出るほど嬉しかった。そして思った。

・・汜莉は本当に俺を好いていてくれる……。本気だったのだ・・
松田は色々と邪推した自分を恥じた。

だが、既に山を下り始めてから四時間が経過している。

擦れ違う人もほとんどおらず、相変わらずの急坂が続いていた。
辺りが暗くなり、松田に再び弱気の虫が訪れて来る。

時刻を確認すると、時計の針は既に午後の七時を指していた。

「もう少し、もう少ししてさっきから言っているけど、全然麓に着かないじゃないか」

と松田は、つい汨莉を非難するような発言をしてしまった。

「……………」

汨莉は黙して答えない。

・ ・ ああ、俺はなんてバカだ。俺を励ますために、もう少し、もう少しって言うてくれているんじゃないか。俺が文句を言える立場か、彼女がいなければ、崖下に落ちて死んでいるかも知れないのに・ ・ 松田は後悔していた。それで、

「ごめん」

と呟くように囁いた。

「ううん、私こそごめんなさい。松田さんを励まそうと思って…………でも、ごめんなさい」

・ ・ 汨莉は俺よりも疲れているはずだ。でも、気丈に俺を支えてくれている・ ・

汨莉の松田を支えている腕は、棒のように硬くなり、既に感覚がなくなっていた。

足腰もフラフラ、それでも気力で松田の身体を支えている。

松田は心の底から感謝していた。

それから一時間ほど歩いて、ようやく道はなだらかになった。

・ ・ もう目の前が到着点、のはずだ？ しかし、景色が違う・ ・

松田は茫然自失、汨莉も呆然と佇んでいる。

そこは、松田たちが朝並んだロープウェー乗り場に隣接する駐車場のはずだったが、景色がまるで違い、オートバイが数台停まっているだけ…………。

期待があっさりと裏切られ、松田は張り詰めていた糸がプツンと切れるのを感じた。

と、それを見透かしたように汨莉が、

「松田さんは、ここで待っていてください」

と気丈に言って遠ざかって行くが、汜莉の歩き方もぎこちない。松田は石の欄干に腰を落としたが、安堵感よりも絶望感が訪れて来ていた。

いざとなると男はだらしのないものだ。

「松田さん！ わかりましたあーッ！」

と叫びながら、汜莉は松田の許に駆け寄って来て、ハッ、ハッ、ハッ……と息を切らして、

「ここは反対側だそうです」

と、松田にとって絶望的な言葉を発した。

3

「反対側……」

ガックリとうな垂れる松田に、

「でも、大丈夫です。あの人たちが、オートバイで送ってくれるそうです」

と、ニコやかな笑みを浮かべて言った。

「ほ、ほんとッ！」

松田にも笑みが浮かぶ。

「本当です。十分ぐらいで着くそうです。一人二十元だって」

「へへへ……、二十元でも二百元でもいいよ」

と笑ったつもりだったが、松田の顔は泣き笑いになっている。

汜莉も途端に気が緩んだのか、ふううと大きく溜め息をつく、倒れ込むように石橋の床に座り込んだ。

二人は二台のバイクに分乗し、山麓をグルッと廻って、ツアーの同行者が待っているはずの駐車場へと向かった。

辺りには外灯もなく真っ暗、

・このままどこかへ連れて行かれてしまったら・

と、松田は少し不安を感じていた。

しかし松田の心配は危惧で、間もなく前方に、外灯で照らし出され

た明るい場所が見えてきた。

松田を乗せたバイクが近づいて行くと、その広い駐車場にたった一台だけバスが停まっている。

外灯の光に浮かびあがったそのバスの、なんと頼もしく見えたことか。

先ず汨莉がバスに乗り込み、続いて松田がステップに片足をかけ顔を出すと、車内から、ワァーと歓声があがり、続いて大きな拍手が巻き起こった。そして、

「お帰りなさい。無事で良かった。ケガはない。はい、これ飲みなさい……」

と、次々に同行者たちから声がかかる。

何時間も待たせ、心配をかけたのに、誰ひとりも文句を言う者はいない。

松田はみんなの温かさに感動で胸が一杯になり、彼らを見下していた自分が、とても恥ずかしかった。

照れ臭さと湧きあがる涙を見られないように、松田は俯いたままペコペコと左右に頭を下げながら車内を通り抜け、汨莉の隣の席に身を沈めた。

汨莉の顔も涙で濡れている。

しかし汨莉は、気丈にもイスから立ち上がると、乗客全員に向かつて、

「对不起、对不起……、謝謝、謝謝……」

と繰り返していた。

松田も立ち上がり照れながらも前後左右と順番に、

「謝謝、謝謝……」

と頭を下げて謝り、汨莉と顔を見合わせてフフツツ……と笑った。

このことがあって、松田は汨莉を心の底から信じた。そして、

・・絶対にこの娘を幸せにしてやる・・
と心に誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8160x/>

上海の光と影と ◇Camouflage（偽装）◇

2011年10月27日11時17分発行